

南武蔵における横穴式石室からみた人と情報の移動

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古間, 果那子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22451

南武蔵における横穴式石室からみた 人と情報の移動

古間 果那子

要旨 本稿は、横穴式石室を構成する立体構造、石材、平面形態などさまざまな要素に基づいて、南武蔵の横穴式石室を分類し、さらに他地域の横穴式石室と比較して、伝播・定着・衰退までに想定される石室構築に関する集団や情報のやり取りがどのようなものであったのか検討するものである。古墳時代後期・終末期の南武蔵は、北武蔵のように目立った支配層の存在がなかったこともあり、さまざまな形態の横穴式石室が存在していた。そのため、どのような勢力が存在し、どのような社会構造であったのか必ずしも明確ではない。

本稿では、構築技術（積み方、石材）と平面形態に注目し、どのような過程で伝播したのかについて明らかにした。その結果、北武蔵・上総・上毛野・東海地方・相模といったさまざまな地域から伝播したことがわかった。また、類似度の高低から石室構築者集団の移動による直接的伝播と情報の伝達による間接的な伝播が想定でき、物流網や集団の移植などのさまざまな要因によって伝播したと推定した。そして導入された横穴式石室の平面形態や構築技術は、地域内で拡散し、継承されるものがある一方で、あまり継承されないものもあった。その結果多様な型式の横穴式石室を生み出すこととなった。このような状況は、南武蔵という地域が、広範囲を支配しうる豪族がいる地域に挟まれた、統率力のない地域であったからこそ起こった現象と考えたい。

古墳時代後期・終末期の南武蔵は、この時期盛んだった広域地域間交流の恩恵により、さまざまな地域から横穴式石室に関する情報や集団が行き来し、多種多様な横穴式石室が併存する特殊な地域であったことを示した。

キーワード：南武蔵、古墳時代後期・終末期、横穴式石室、遺構の伝播、地域間交流

はじめに

古墳時代後期・終末期の南武蔵では、さまざまな形態の横穴式石室が構築されたことが先行研究によってわかっており、おおむね編年も研究者の間で一致している。しかし横穴式石室の構築にあたって、どのような集団間の交流や情報の行き来があったのかという点は十分に明らかにされていない。

本稿では、武蔵南部地域における横穴式石室の伝播・定着・終焉の過程を検討し、古墳時代後期・終末期の南武蔵がどのような社会であったのか考察する。

本稿で対象とする古墳名は第1～4表の通りである。第1, 2図中の番号は第1～4表に対応する。

1. 研究史と課題

【第1表】自然石積みの横穴式石室集成表

地図番号	古墳名	型式	文献	地図番号	古墳名	型式	文献
1	赤羽台3号墳	両袖形B型	22,23	30	神明上古墳	小石室・石棺	14,16
20	白糸台5号墳	無袖形A型	3	31	平山2号墳	無袖形B型	14,15
21	高倉6号墳	両袖形A型	3	32	小宮古墳	両袖形A型	20
	高倉9号墳	両袖形A型	3	33	経塚下古墳	小石室・石棺	6,8
	高倉10号墳	両袖形A型	3	34	大神古墳	無袖形A型	4
22	御嶽塚10号墳	両袖形A型	18	35	浄土1号墳	無袖形A型	5,6,7
	御嶽塚11号墳	無袖形B型	18		浄土2号墳	小石室・石棺	7
	御嶽塚20号墳	無袖形B型	19		浄土3号墳	小石室・石棺	7
24	下谷保1号墳	両袖形A型	10		浄土4号墳	小石室・石棺	7
					浄土5号墳	小石室・石棺	7
25	四軒在家1号墳	両袖形A型	9	37	鹿島古墳	片袖形B型	21
	四軒在家2号墳	両袖形A型	9	38	船田古墳	片袖形B型	17
	四軒在家3号墳	両袖形A型	9		39	瀬戸岡16号墳	無袖形B型
	四軒在家4号墳	両袖形A型	9	瀬戸岡17号墳		無袖形B型	1
	四軒在家5号墳	両袖形A'型	9	瀬戸岡22号墳		両袖形A型	1
	四軒在家6号墳	両袖形A'型	9	瀬戸岡23号墳		無袖形A型	1
	四軒在家8号墳	両袖形A型	9	瀬戸岡32号墳		無袖形A型	1
	四軒在家9号墳	無袖形A型	9	瀬戸岡30号墳		無袖形A型	2
26	塚原5号墳	無袖形B型	11,12	瀬戸岡7号墳		無袖形B型	3
	塚原6号墳	両袖形A型	13	瀬戸岡34号墳		両袖形A型	3
	塚原9号墳	無袖形A型	3	40	秋川No.3-9古墳	無袖形B型	3
29	万蔵院台1号墳	両袖形A型	14,15	41	道場1号墳	無袖形A型	24
	万蔵院台2号墳	片袖形B型	14,15		道場2号墳	無袖形A型	24
	万蔵院台3号墳	無袖形B型	14,15				

【第2表】切石積みの横穴式石室集成表1

地図番号	古墳名	型式	文献	地図番号	古墳名	型式	文献
1	赤羽台5号墳	両袖形A-a-1型	22,23	7	赤田3号墳	両袖形A'-b-3型	31
2	志村1号墳	両袖形C-c-2型	36	8	下麻生1号墳	両袖形C-c-2型	37
3	加瀬台3号墳	両袖形A-a-1型	28		下麻生2号墳	両袖形C-c-2型	37
4	第六天古墳	両袖形A'-b-3型	29	9	下沼部古墳	両袖形B-a-1型	36
5	三保杉沢古墳	無袖形B-b-3型	41	10	多摩川台4号墳	片袖形B-a-4型	32,33
6	北門1号墳	無袖形B-b-3型	30		多摩川台5号墳	両袖形B-a-4型	33,34
	北門2号墳	無袖形B-b-3型	30		多摩川台(新)8号墳	両袖形B-a-3型	32,35
	北門5号墳	両袖形B-b-3型	30	11	観音塚古墳	両袖形B-a-4型	38
7	赤田1号墳	両袖形A'-b-3型	31	12	浅間様古墳	両袖形B-a-1型	45
	赤田2号墳	両袖形A'-b-3型	31	13	法界塚古墳	両袖形B-c-2型	48

【第3表】切石積みの横穴式石室集成表2

地図番号	古墳名	型式	文献	地図番号	古墳名	型式	文献
14	馬網古墳	両袖形 C-a-1 型	43,44	19	天文台構内古墳	両袖形 A-a-1 型	26
15	大蔵1号墳	両袖形 C-c-1 型	42	23	熊野神社古墳	両袖形 A-a-1 型	25
16	殿山1号墳	両袖形 C-c-2 型	42	24	下谷保10号墳	両袖形 A'-a-1 型	46
	殿山2号墳	両袖形 C-c-1 型か	42	27	稲荷塚古墳	両袖形 A-a-1 型	1,27
17	喜多見稲荷塚古墳	両袖形 B-c-1 型	39,40	28	臼井塚古墳	両袖形 A-a-1 型	1
18	猪方小川塚古墳	両袖形 B-c-2 型	47	36	北大谷古墳	両袖形 A-a-1 型	3

【第4表】他地域の横穴式石室集成表

地図番号	古墳名	文献	地図番号	古墳名	文献
42	金冠塚古墳	49	48	土気舟塚古墳	54
43	附川8号墳	50	49	金鈴塚古墳	55,56
44	田木山1号墳	50	50	三ノ宮・下谷戸7号墳	57
45	桜山1号墳	51	51	船津L-209号墳	58
46	西原18号墳	52	52	中原4号墳	59
47	駄ノ塚古墳	53	53	秋葉1号墳	60

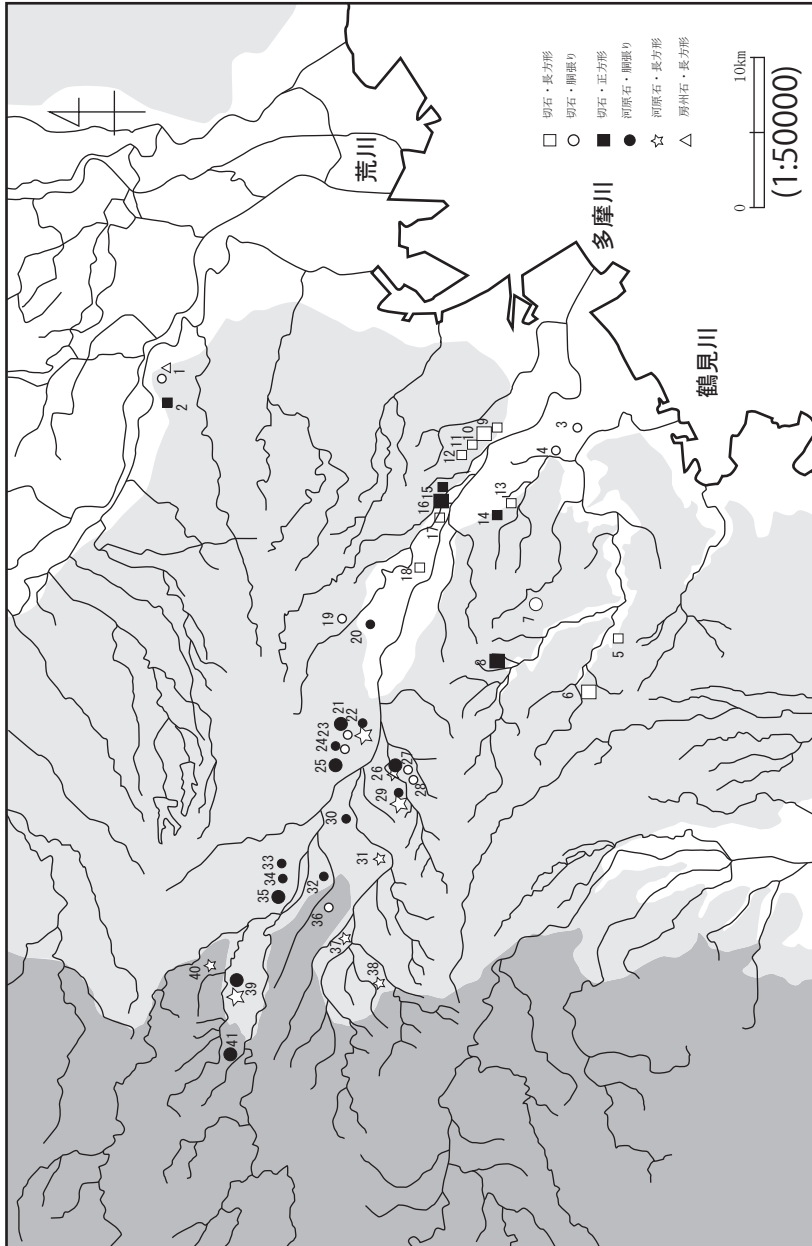
南武蔵の横穴式石室の分類・編年研究、被葬者の集団の性格など、多岐にわたる研究がなされるようになったのは1980年代からである。

南武蔵の横穴式石室について継続的に研究をおこなった池上悟は、東国各地の胴張り構造の横穴式石室を集成し（池上1980）、また尺度による横穴式石室の編年をおこなった（池上1982）。そして、古墳時代終末期の南武蔵についてまとめた（池上1992）。また十菱駿武（1985）は、多摩川流域の横穴式石室を①凝灰岩や砂岩の切石積横穴式石室をもつ高塚古墳、①'①のうち半地下式石室のもの、②河原石積の横穴式石室をもつ高塚古墳、②'河原石積の小規模な半地下式横穴式石室（小石室）、③横穴墓に分け、その差を時期差以外に階層差によるものとした。

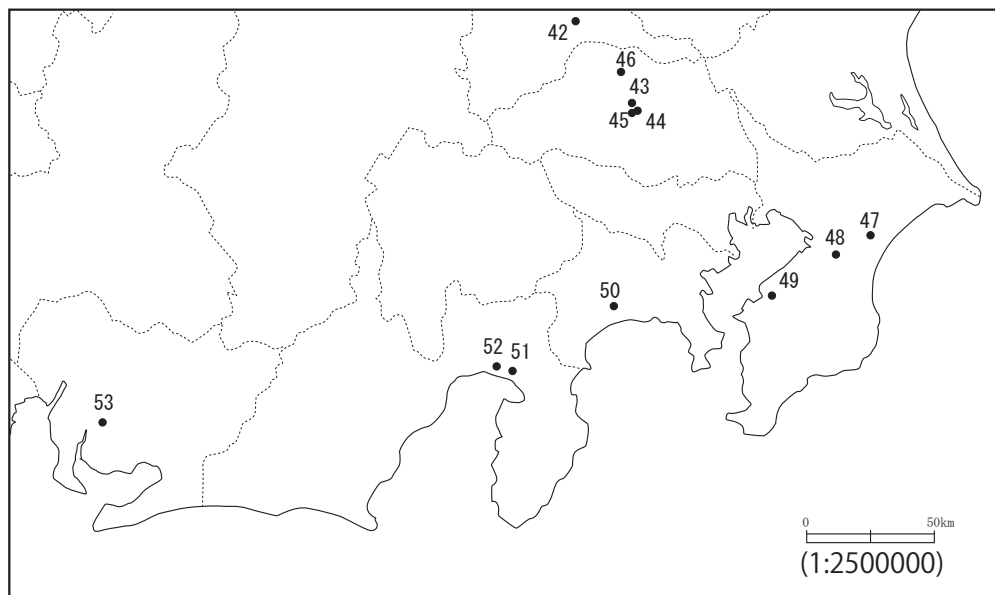
松崎元樹（2012）は多摩川流域の終末期古墳や横穴墓から出土した威信財について触れ、これらの終末期群集墓の造墓集団が地域再編にかかわっていた蓋然性が高いとした。

最近では小林孝秀（2014）、草野潤平（2016）らによってより細かい横穴式石室の分析および他地域との比較研究が行われ、当地域の横穴式石室がさまざまな地域に遡源をもつことがわかった。

以上先行研究を概観した。編年観や7世紀におけるこの地域の政治的機能の転換については共通認識が得られているものの、南武蔵の横穴式石室を総合的に分析し、その社会にまで踏み込んだ研究は少ない。本稿では導入から終焉までの様相について明らかにすることで、この地域における古墳時代後期・終末期の社会的様相に迫ることとしたい。



第1図 南武蔵における横穴式石室の分布 (国土地理院地図を用いて執筆者作成)
※同じマークが重複する場合はマークを大きくした



42. 前橋市金冠塚古墳 43. 東松山市附川8号墳 44. 東松山市田木山1号墳 45. 東松山市桜山1号墳 46. 熊谷市西原18号墳 47. 山武市駄ノ塚古墳 48. 千葉市土気舟塚古墳 49. 木更津市金鈴塚古墳 50. 伊勢原市三ノ宮・下谷戸7号墳 51. 富士市船津L-209号墳 52. 富士市中原4号墳 53. 豊田市秋葉1号墳

第2図 他地域の横穴式石室の分布（国土地理院地図をもとに執筆者作成）

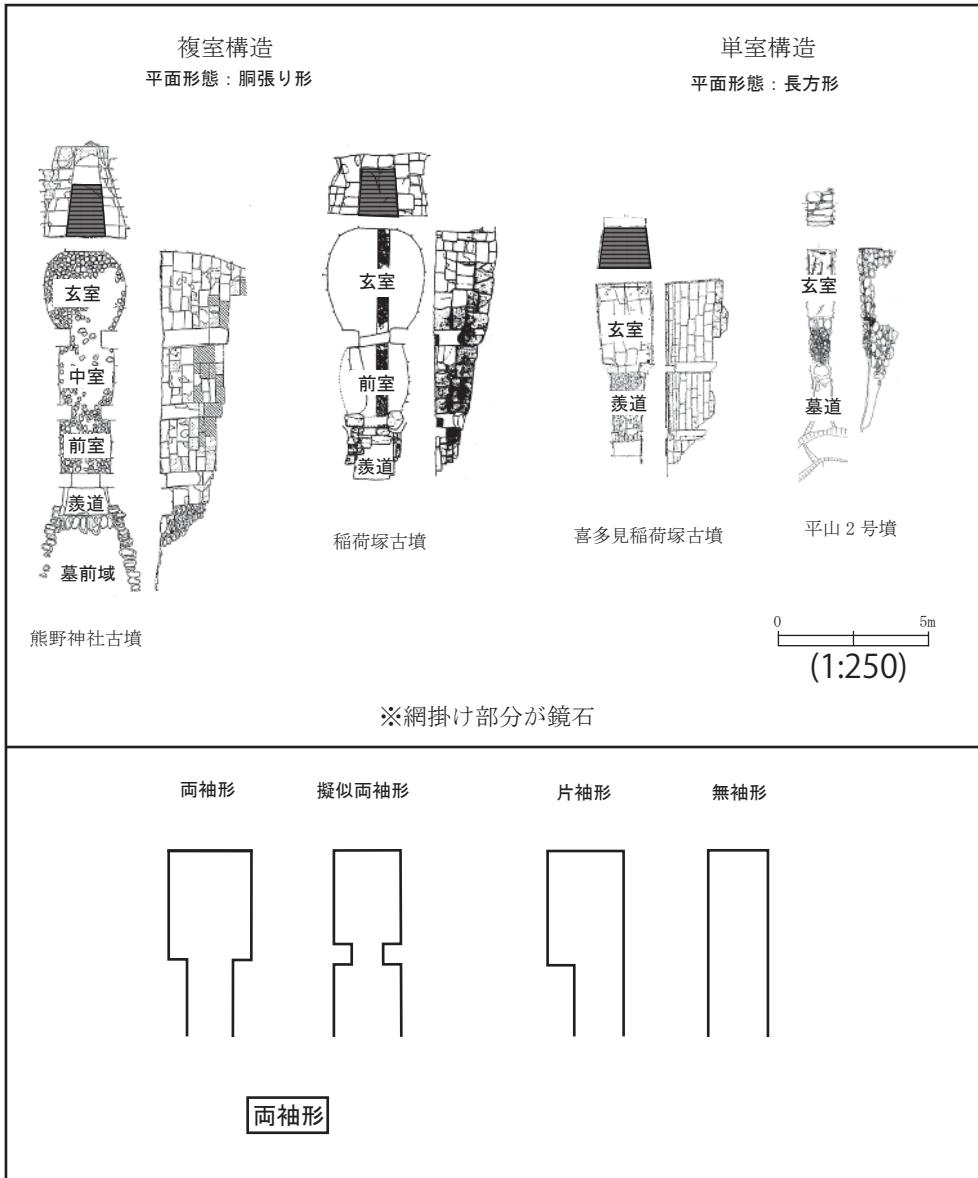
2. 分類と編年

まず、横穴式石室の分類を行う。本校で使用する横穴式石室の各部名称は第3図に示すとおりである。

次に分類方法を説明する。本稿では横穴式石室がどのように伝播したのか明らかにするべく、太田宏明（2016）によって積極的になされている属性分析を参考にした。太田（2016）は、横穴式石室を複数の属性、つまり物質や現象に備わっている性質や特徴の集合体として捉えた。

太田（2016）が挙げている属性のうち、特に①意匠的属性（平面形態や主軸での断面形態など）と②技術的属性（加工や用石法）に注目した。太田（2016）は、意匠的属性は視認性が高く、技術的属性は視認性が低いとしており、技術的属性の共通性が高いほど、より直接的な接触による横穴式石室構築技術の伝達を想定できるとした。その場合、工人の移動もしくは情報が伝達するために十分な個人間、あるいは集団間の直接的で密接な接触が不可欠となる。

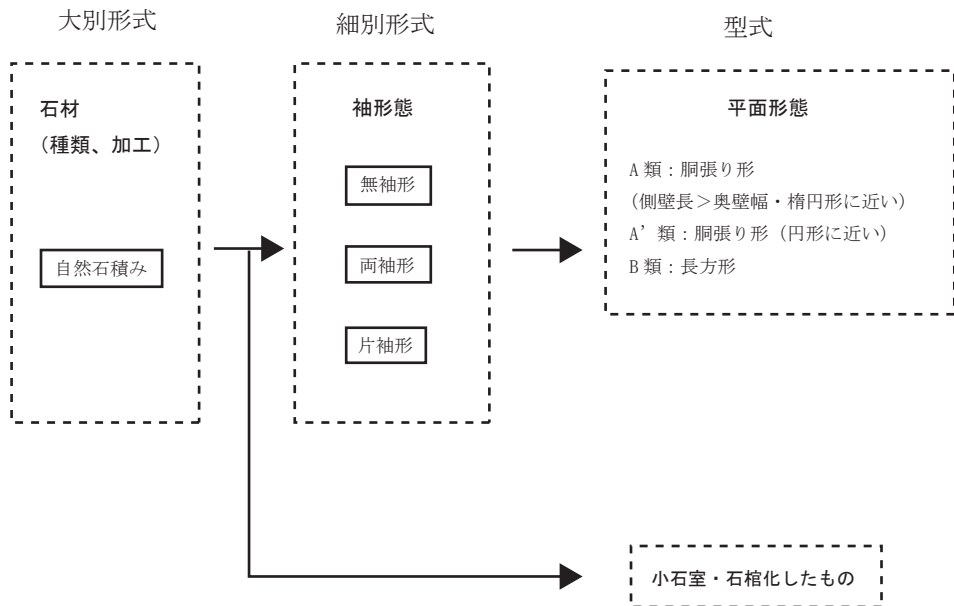
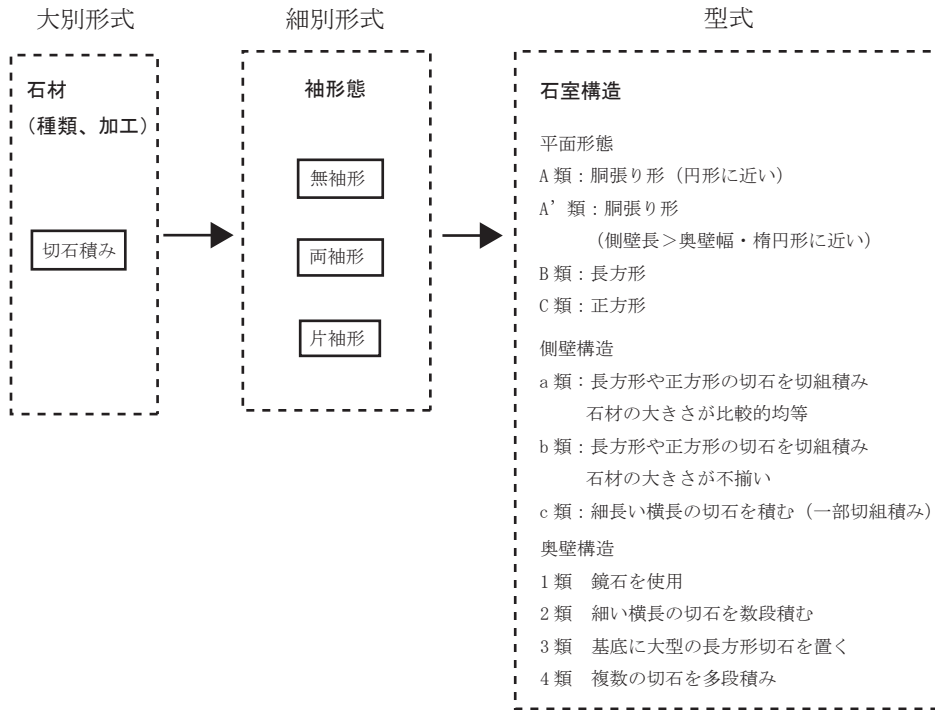
この意匠的属性、技術的属性に注目して分類すると、まず加工された石材で構築している切石積みの横穴式石室と、無加工の石材で構築する自然石積みの横穴式石室に大別できる（第4図）。次に両袖、片袖、無袖に分類した。この際、袖の形状がはっきりしない小規模な石室は、小石室・石棺化したものとした。その後、切石積みの横穴式石室は平面形態（A, A', B, C類）、



第3図 用語の定義（報告書をもとに執筆者作成）

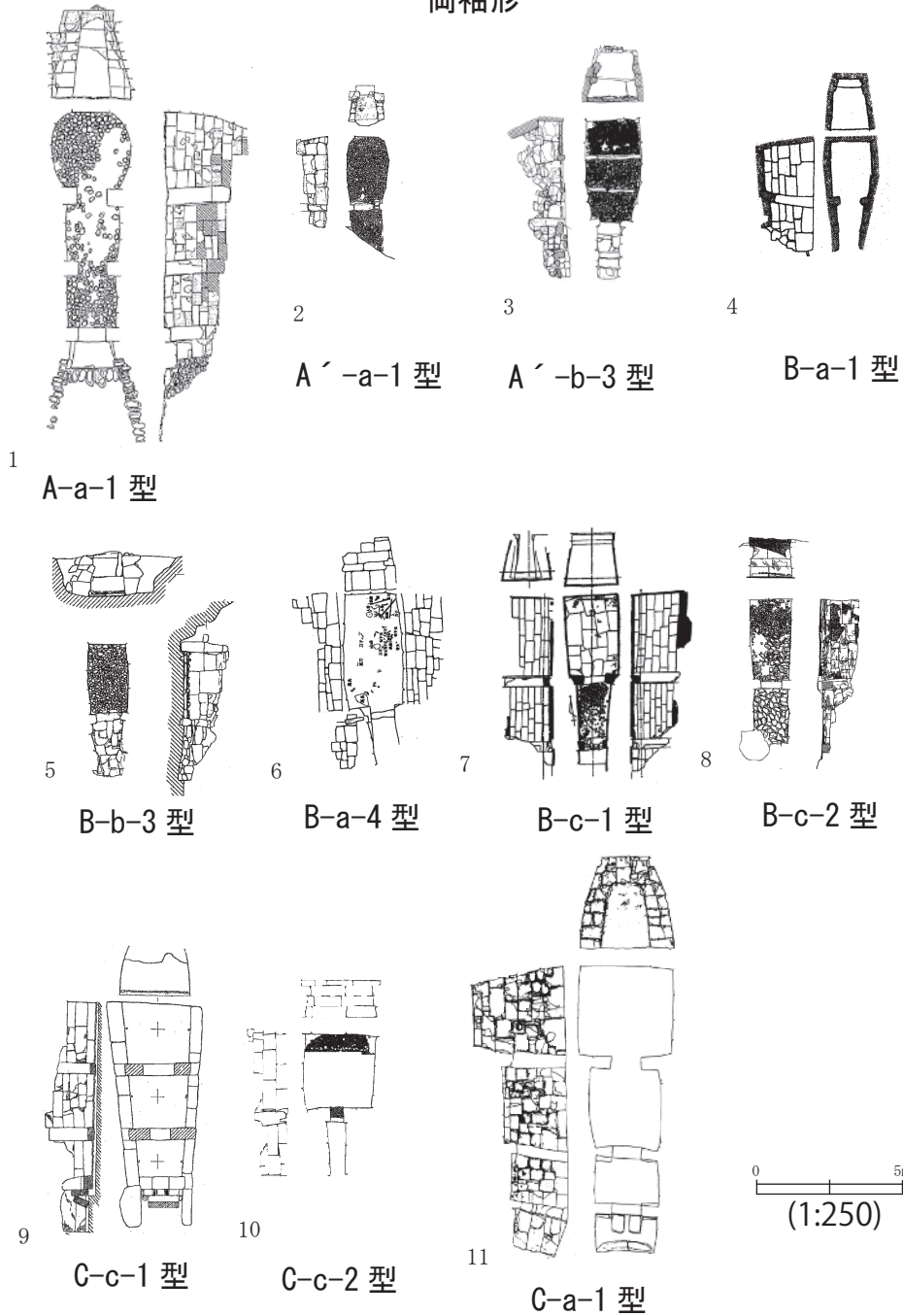
奥壁構造（1～4類）、側壁構造（a, b, c類）で分類した。一方自然石積みの横穴式石室は、石積みの方法にあまり差が見られなかったため、平面形態（A, A', B類）のみで分類した。これら諸属性を組み合わせて、「切石積み・両袖形・A-a-1」のように各型式を設定した。個々の型式の代表例は第5～8図の通りである。

最後に編年は横穴式石室の型式変化と、須恵器、鉄鏃、埴輪に基づく。須恵器は陶邑産と湖西産が出土するので、田辺昭三（1981）と後藤健一（2015）による編年に依った。鉄鏃は平林



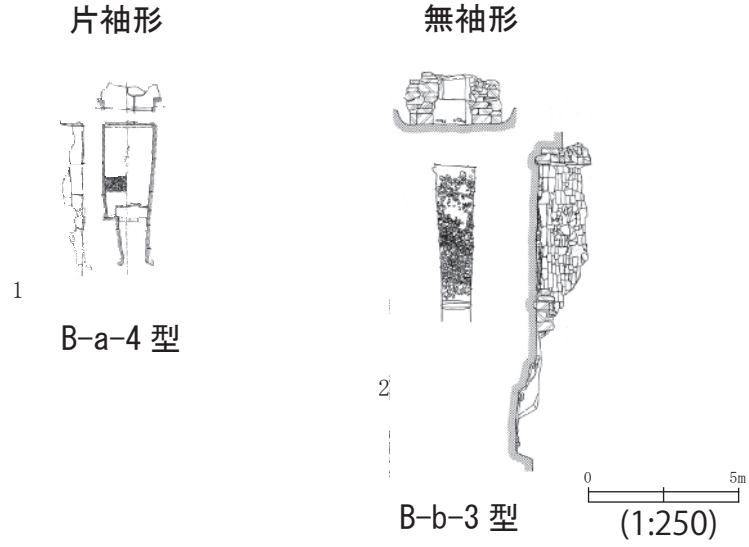
第4図 分類体系 (執筆者作成)

両袖形



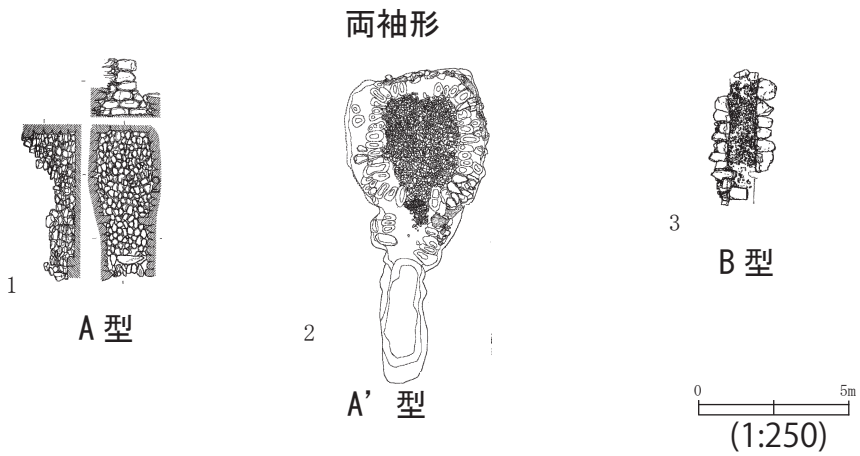
1. 熊野神社古墳 2. 下谷保10号墳 3. 赤田2号墳 11. 赤田3号墳 4. 浅間様古墳 5. 北門5号墳 6. 観音塚古墳 7. 喜多見稻荷塚古墳 8. 猪方小川塚古墳 9. 大蔵1号墳 10. 殿山1号墳 11. 馬絹古墳

第5図 横穴式石室の型式分類① (報告書をもとに執筆者作成)



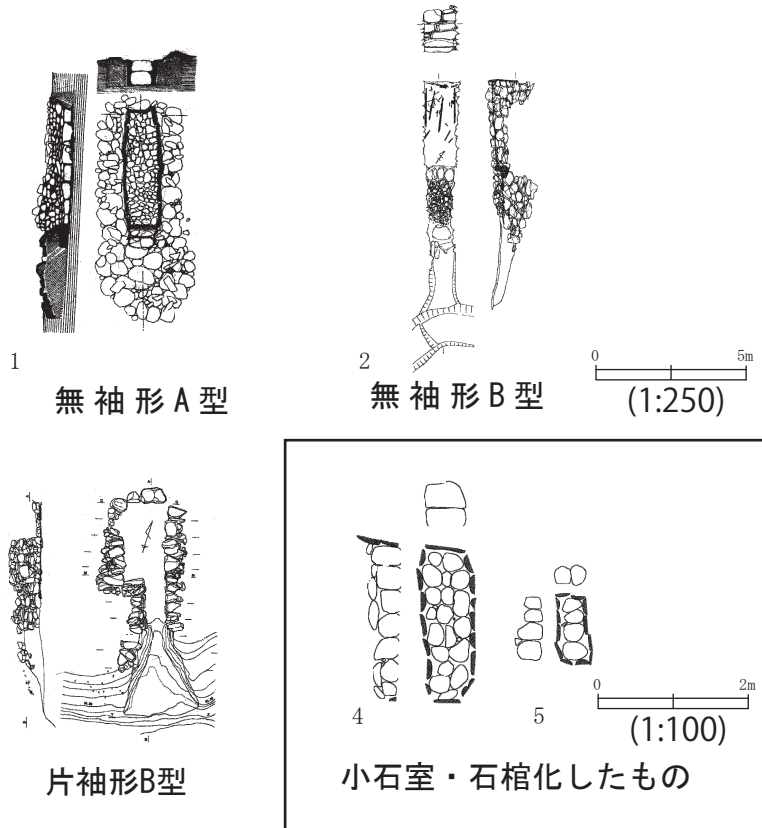
1. 多摩川台 4 号墳 2. 北門 1 号墳

第 6 図 横穴式石室の型式分類② (報告書をもとに執筆者作成)



1 下谷保 1 号墳 2. 四軒在家 5 号墳 3. 赤羽台 3 号墳

第 7 図 横穴式石室の型式分類③ (報告書をもとに執筆者作成)



1. 瀬戸岡 32 号墳 2. 平山 2 号墳 3. 万蔵院台 2 号墳 4. 浄土 3 号墳 5. 浄土 5 号墳

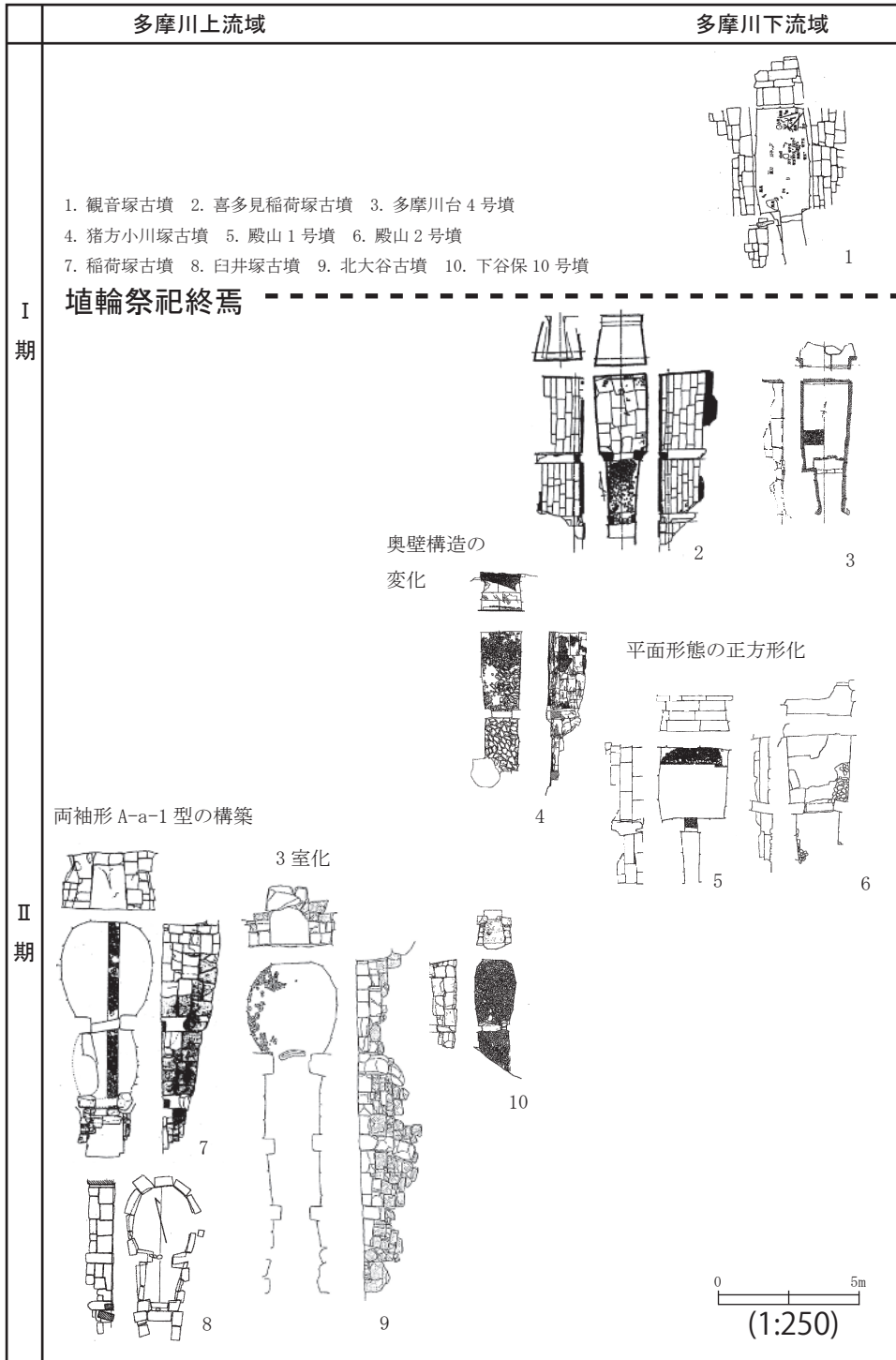
第 8 図 横穴式石室の型式分類④ (報告書をもとに執筆者作成)

大樹 (2013) の編年を用い、埴輪は川西宏幸 (1978) の編年とその他の論文を参考にした⁽¹⁾。

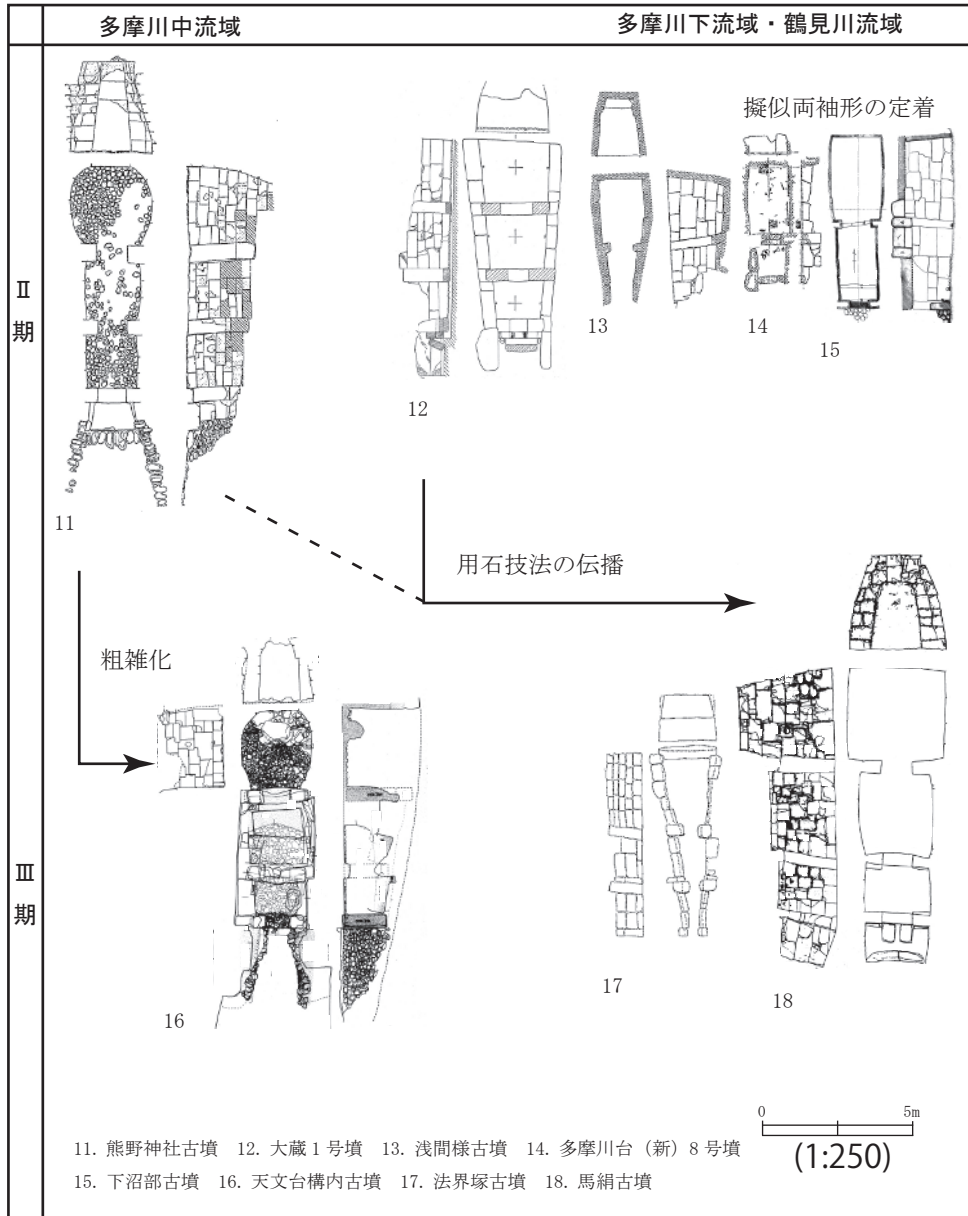
これらに基づき筆者は南武蔵の横穴式石室をⅠ～Ⅲの3つの時期に分けた。各期のおおよその歴年代は須恵器によって推測した。Ⅰ期は田辺編年のTK43～TK209型式期であり、およそ6世紀後半から7世紀初頭頃である。Ⅱ期は後藤(2015)編年のⅣ-1期からⅣ-2期に該当し、およそ7世紀前半～中葉頃である。Ⅲ期は後藤編年Ⅳ-3期からⅤ-1期に該当し、およそ7世紀後半～7世紀末葉頃である。

Ⅰ期では切石積みの横穴式石室が、多摩川下流域と鶴見川下流域に分布する、南武蔵における最後の前方後円墳を中心に採用された(第9～11図)。自然石積みの横穴式石室は多摩川中・上流域を中心に、さまざまな型式の横穴式石室が採用された(第12図)。南武蔵では7世紀初頭を前後する時期に埴輪の生産が終焉し、前方後円墳の築造停止が起こると指摘されており(小野本 2009)、これがⅠ期の終わりを画する。

続くⅡ期になると円墳が主体的となる。この時期、各小地域でバラエティー豊かな横穴式石



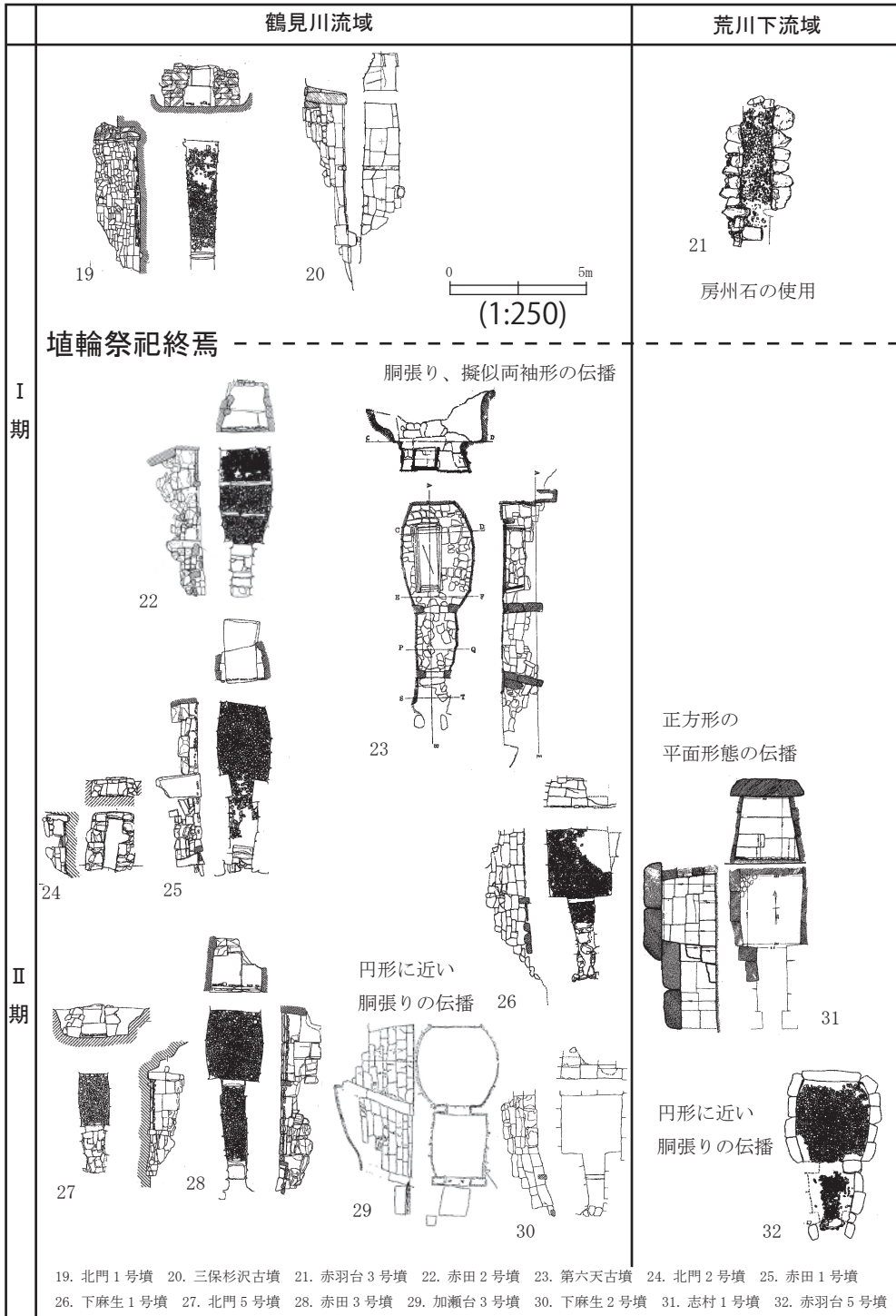
第9図 切石積みの横穴式石室の編年①（報告書をもとに執筆者作成）



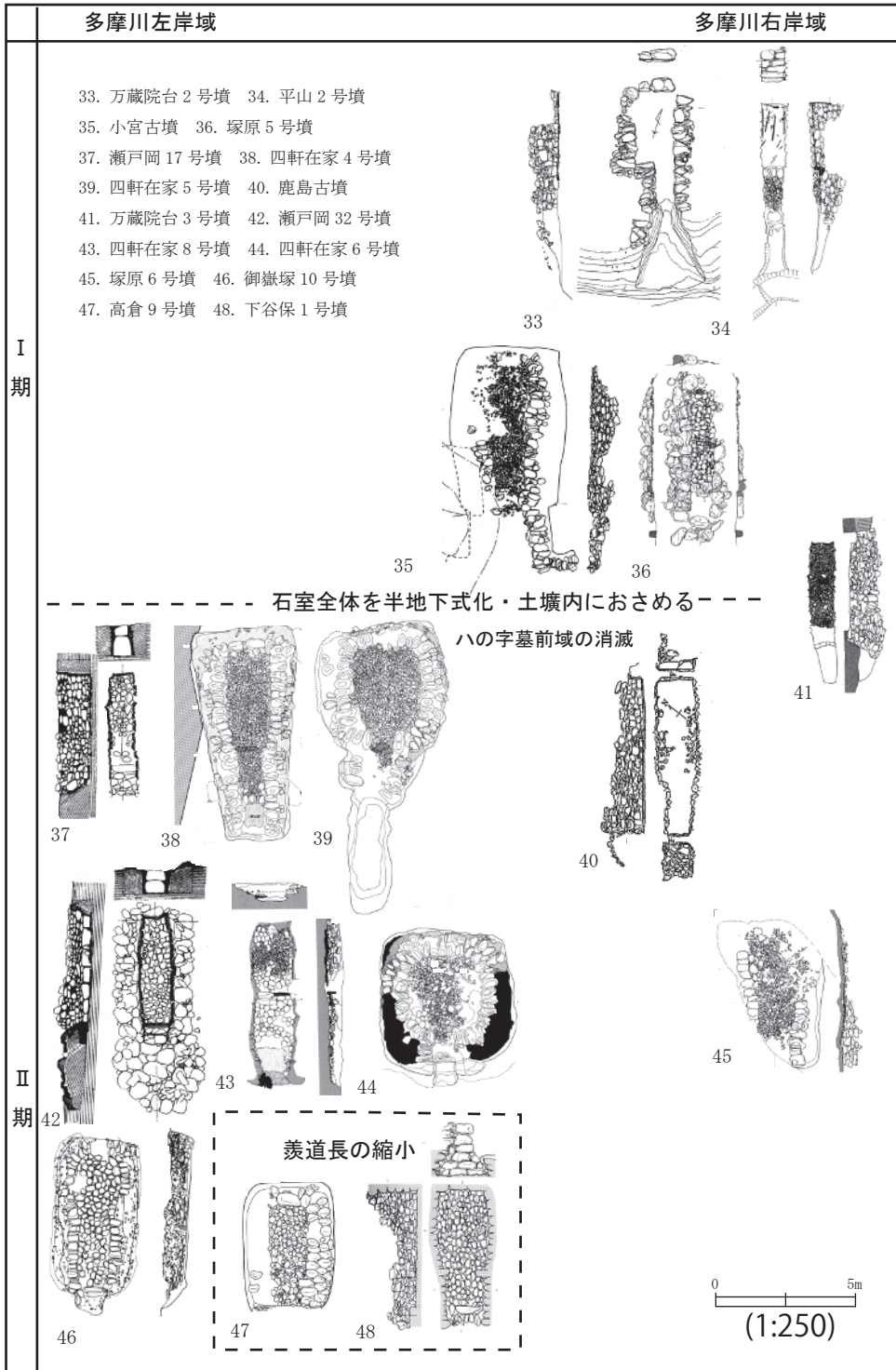
第10図 切石積みの横穴式石室の編年②(報告書をもとに執筆者作成)

室が展開する中、切石積みの横穴式石室に両袖形 A-a-1 型が導入されると、南武蔵全体で胴張り(平面形態 A, A' 類)あるいは稲荷塚古墳例のような複室の石室が増える(第9~11図)。自然石積みの横穴式石室は、多摩川中・上流域全体でさまざまな型式の横穴式石室が構築された(第12, 13図)。

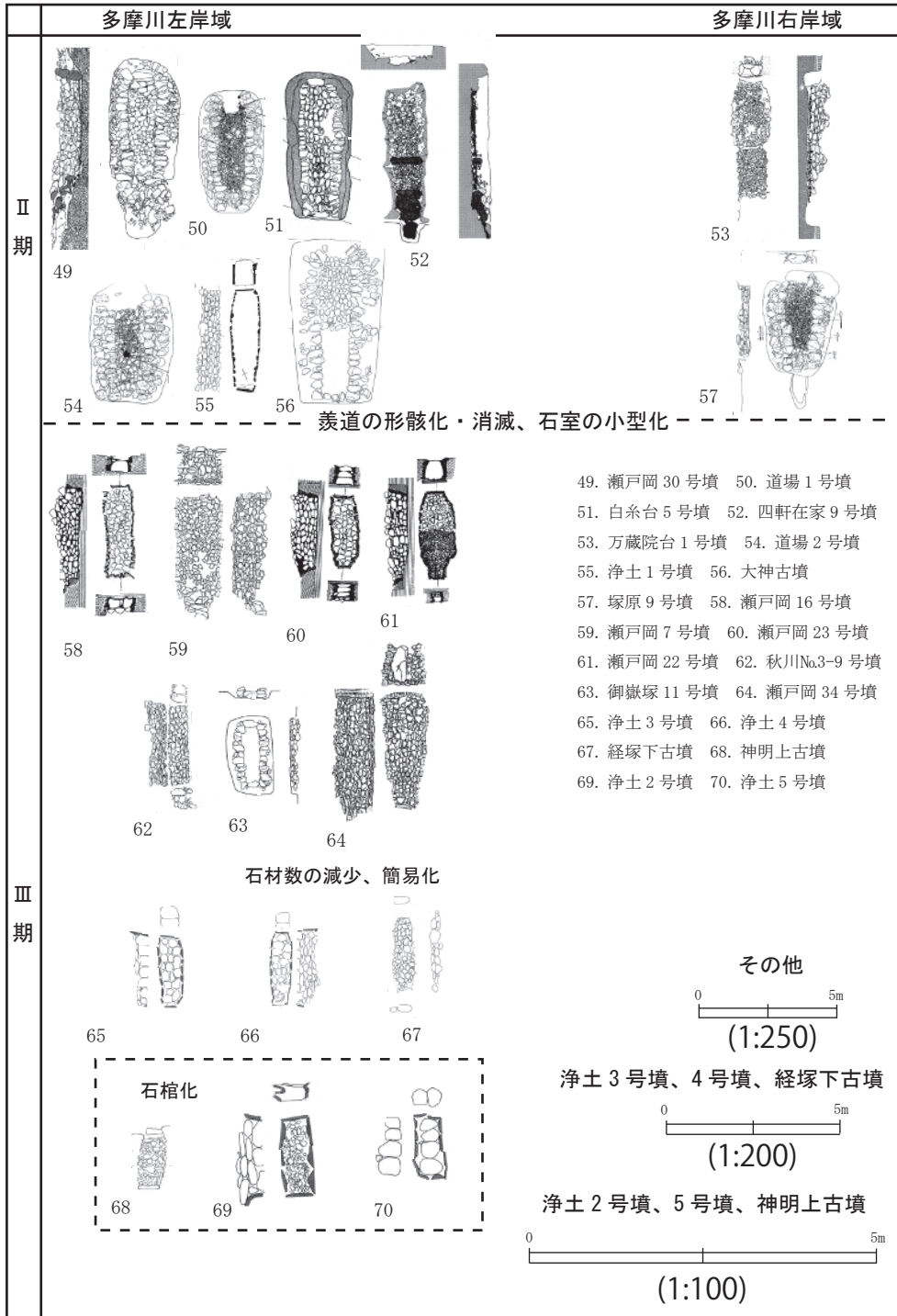
そしてⅢ期には横穴式石室の数が減少するとともに、切石積みの横穴式石室では畿内からの



第11図 切石積みの横穴式石室の編年② (報告書をもとに執筆者作成)



第 12 図 自然石積みの横穴式石室の編年① (報告書をもとに執筆者作成)



第 13 図 自然石積みの横穴式石室の編年② (報告書をもとに執筆者作成)

技術導入が伺える、熊野神社古墳の墳丘構築技術や室構造が拡散・定着した（第10図）。自然石積みの横穴式石室は、Ⅲ期には規模が小さくなり、最終的に石棺状になって終焉する（第13図）。小石室・石棺化は、古墳時代終末期に全国でみられる普遍的な変容である。

3. 南武蔵の横穴式石室からみた人と情報の移動

第2節で述べたように、平面形態に加えて構築技術も共通している横穴式石室を石室構築者集団の移動による直接的伝播と想定した。一方平面形態など模倣しやすい箇所のみが共通していた場合、①南武蔵で独自の型式に変化している例、②複数地域の石室の特徴が融合している例、③中間地域を挟んで伝播する過程で形が変化した例が認められる。つまり、横穴式石室に関する情報の伝達による間接的な伝播と想定できる。③は太田（2009）の「連鎖型伝播」、鈴木（2003）の「漸進的伝播」に該当する。

また、連続した変化が見られる石室群を系統として捉え、それ以外は流行として捉えた。南武蔵における横穴式石室の伝播と在地化の過程をモデル図化したものが第14図である⁽²⁾。

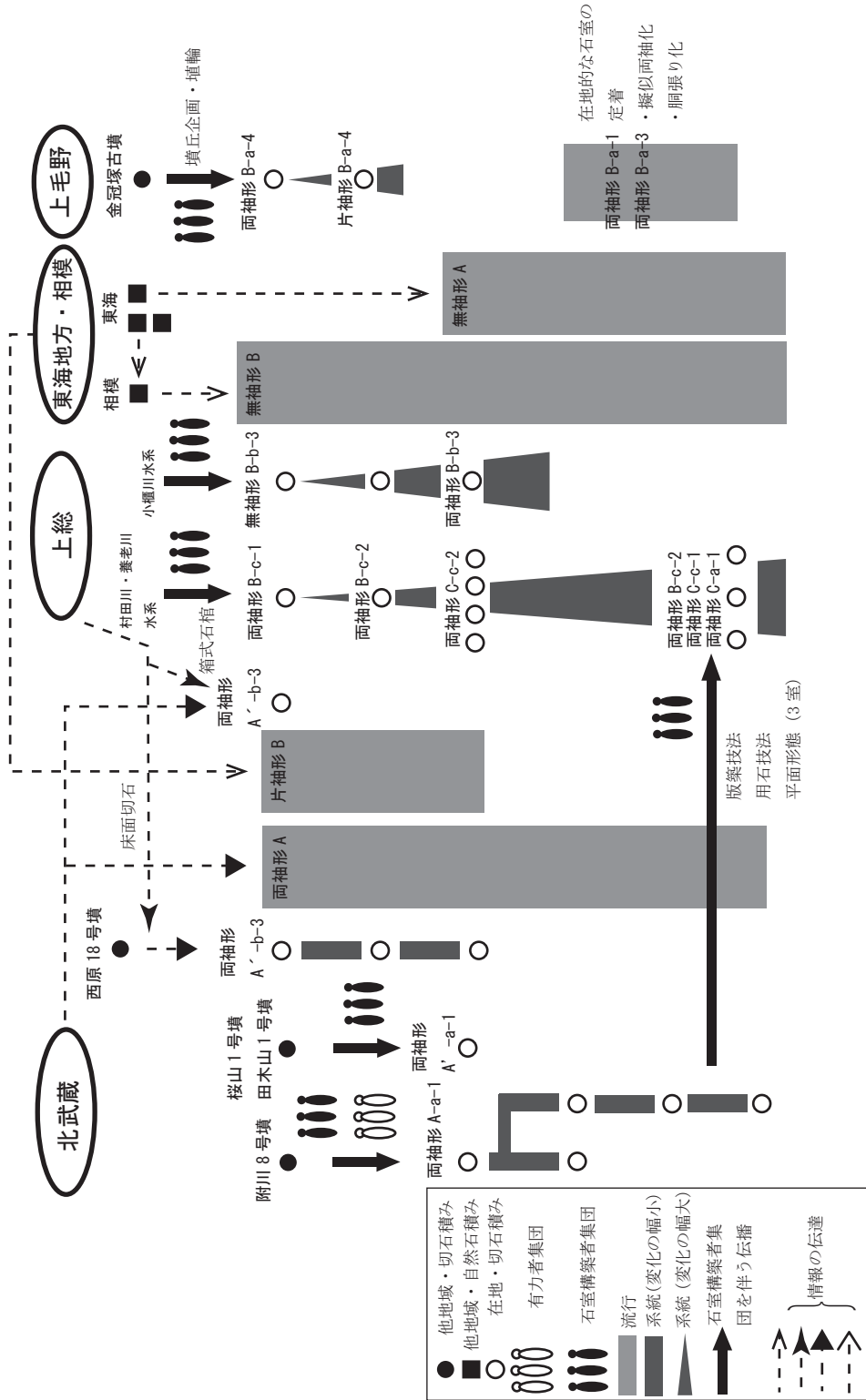
3-1 石室構築者集団の移動による直接的伝播

（上毛野からの伝播）

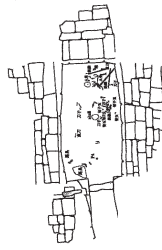
南武蔵の大田区観音塚古墳（地図番号11、以下番号のみ示す。第15-1図）は筆者分類の両袖形B-a-4型である。つまり、両袖形・玄室床面長方形・側壁はほぼ均一の石材による切石組積み・奥壁は多段積みの構造を有する。出土の円筒埴輪は、川西（1978）編年Ⅴ期に該当し（第16-1図）、また器財埴輪、人物埴輪が出土しているため、6世紀末に比定されている（江口2005）。筆者編年のⅠ期に位置づけられる。

この祖形は上毛野の前橋市金冠塚古墳と想定したい（42、第15-2図）。両古墳とも平面形態が長方形で、第3図下段の左端のような通常の両袖形である。関東地方では第3図下段の左から2番目にあるような擬似両袖形が一般的であるが、上毛野の横穴式石室は通常の両袖形が多い。奥壁・側壁ともに複数の切石を多段積みに行っている点も共通している。金冠塚古墳や綿貫観音山古墳は、角閃石安山岩に粗いケズリ加工を施した「削石」（右島1993）で石室を構築している⁽³⁾。同じ軟石を用いているため明確な技術的違いは見出せないものの、奥壁に鏡石状の石材を用いる武蔵の石室とは技術系統が異なる可能性がある。

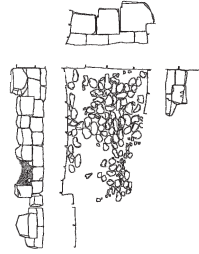
また金冠塚古墳からも川西（1978）編年Ⅴ期の円筒埴輪（第16-2図）が出土しているから、観音塚古墳と概ね同時期（6世紀後半～末頃）に築造されたと考えたい。観音塚古墳からは角閃石安山岩を含む円筒埴輪が出土しており、上毛野から供給されたことを小野本敦（2008b, 2009）が指摘している。円筒埴輪は同じ5条突帯で、墳丘も同じ約50mの前方後円墳であることから、両古墳の被葬者の相対的地位がほぼ等しかったと小野本（2009）は想定している。



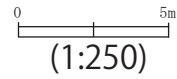
第14図 南武蔵における横穴式石室の伝播と在地化の過程 (執筆者作成)



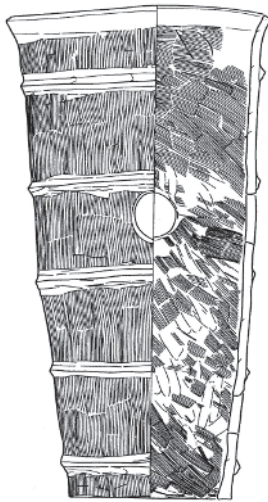
1. 大田区・観音塚古墳



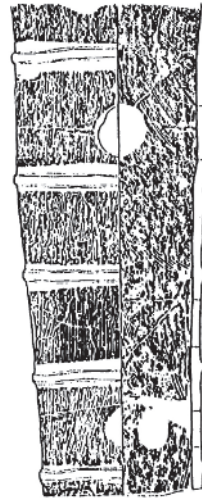
2. 前橋市・金冠塚古墳



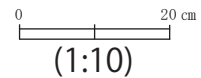
第 15 図 上毛野から伝播した横穴式石室（報告書をもとに執筆者作成）



1. 大田区・観音塚古墳出土の円筒埴輪



2. 前橋市・金冠塚古墳の円筒埴輪



第 16 図 大田区観音塚古墳と前橋市金冠塚古墳出土の円筒埴輪（報告書をもとに執筆者作成）

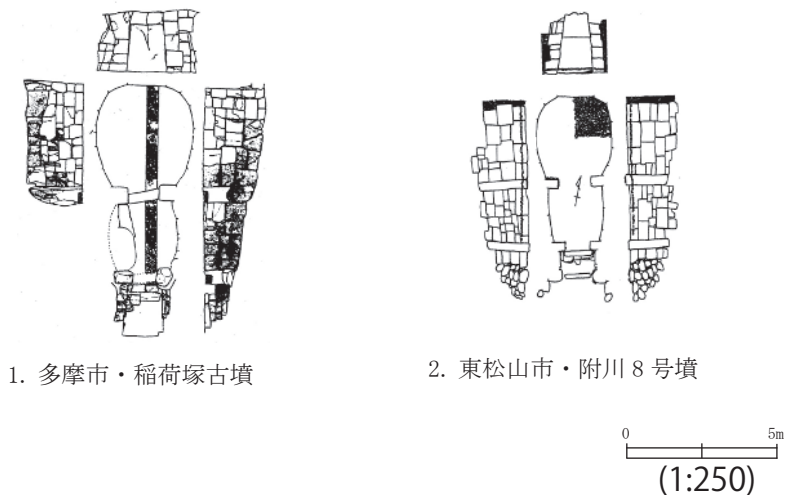
以上から観音塚古墳の被葬者は、同じ階層の被葬者と擬制的同族意識を共有することで石室を導入したと推測したい。

(北武蔵からの伝播)

北武蔵では埴輪消滅期前後に、切石積みで胴張り形を呈する石室（本文では截石切組積古墳）が比企丘陵を中心に出現することがわかっている（田中 1983）。また草野潤平（2016, 第3章第4節）は、松山台地周辺の複室構造胴張り石室を①若宮八幡古墳から始まる系列と②冑塚古墳から始まる系列に分け、若宮八幡古墳が埴輪を有することから両者の開始を6世紀末葉前後とした。以上から、南武蔵より先行して北武蔵で切石積みの胴張り形石室が構築されるようになったと考えたい。

南武蔵の両袖形 A-a-1 型で最も古い多摩市稲荷塚古墳（27, 第17-1 図）の祖形は東松山市附川8号墳（43, 第17-2）と想定したい。その根拠は、①平面形態が円形に近い胴張り形を呈する点、②2室構造で前室も胴張り形を呈する点、③玄室から羨道にかけて礫を敷いている点、④長方形や正方形の切石を切組積みしており、奥壁に鏡石を使用している点が共通しているの4点である。

また草野（2016, 第3章第5節）は、南武蔵の多摩市稲荷塚古墳、同市白井塚古墳（28）は奥壁隅角の円弧を強く意識した処理がなされているとし、同様の特徴が見られる附川8号墳や東松山市田木山2号墳を祖形として挙げた。そしてこれらの古墳の築造時期がTK209型式期に後続することから、稲荷塚古墳の祖形候補と北武蔵のTK209型式期の諸事例とは関連性が見出しがたく、いかに遡らせても7世紀第2四半期より古く求められないとした（草野 2016,



第17図 北武蔵から伝播した横穴式石室①（報告書をもとに執筆者作成）

第3章第5節)。稲荷塚古墳は年代の根拠となりうる遺物がほとんどない。附川8号墳は石室内から多量の鉄鏃と周濠内から須恵器の提瓶2点が出土している。鉄鏃は平林編年Ⅱ期に該当する。提瓶は後藤編年Ⅳ-2前期に該当する。以上から7世紀前半～中葉頃の築造と考えた。類似性の高い稲荷塚古墳も同時期頃の築造、筆者編年のⅡ期と考えたい。

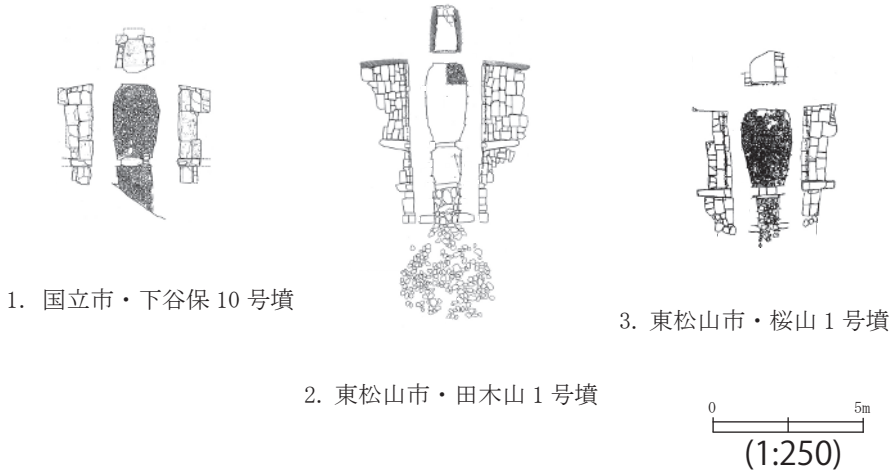
稲荷塚古墳や熊野神社古墳で代表される南武蔵の両袖形 A-a-1 型は、それまで有力な古墳が存在しなかった多摩川中～上流域に7世紀前半頃、突如出現する。これらの古墳は墳丘規模が大きいことが特徴である。特に熊野神社古墳は葺石をもつ上円下方墳で、①墳丘2段目内に石室が設置され、かつ墳丘3段目に玄室天井部がかかる点や②掘り込み地業をしている点が同時期の畿内の終末期古墳と共通している（青木2006）。また、後の寺院造営技術にも通じる版築状盛土をおこなっていることや七曜文銀象嵌鞘尻金具という特殊な遺物が出土していることが指摘されている（草野2006）。このような様相について広瀬和雄（2012）は、石室を構築する首長層から集団的帰属意識が読み取れ、彼らは7世紀中頃における北武蔵から南武蔵への政治センターの移動に伴う集団であると解釈した。

また、これらの古墳は北武蔵の附川8号墳や上円下方墳である山王塚古墳も含め、東山道武蔵路に沿って築造されていることが指摘されている（小野本2008a）。

このように両袖形 A-a-1 型の被葬者は比企地域から移動してきた有力者集団と想定でき、畿内政権と密接な関係を築きつつ、南武蔵の多摩地域を支配したと考えられる。なおこの型式は、3室化する以外あまり変化しない。また、同じ平面形態や構築技術が他の型式にも見られるようになるため、地域内での工人の拡散が想定できる。

両袖形 A-a-1 型の国立市下谷保10号墳（24, 第18-1図）の祖形は東松山市田木山1号墳（44, 第18-2図）、同市桜山1号墳（45, 第18-3図）と想定した。両者は玄室の平面形態が狭長な胴張り形を呈し、奥壁隅角にカーブを意識している点が共通している。また、石材の加工や積み方、鏡石の使用という点でも類似している。下谷保10号墳の年代比定の根拠となる遺物として、周濠内から出土した須恵器の平瓶と杯蓋がある。平瓶は後藤編年Ⅳ-1期に該当し、報告書では伝世品とされている（清水ほか編2014）。杯蓋は後藤編年Ⅳ-1後半に該当するので、筆者編年のⅡ期にあたる。田木山1号墳との共通点は報告書内でも言及されているが、田木山1号墳を複室構造と想定し、下谷保10号墳も同様に複室構造であると推測している（清水ほか編2014）。筆者は、下谷保10号墳が複室構造である可能性は否定しないものの、全形が不明なため判断はできないと考える。

桜山1号墳の年代の根拠となるフラスコ形長頸瓶は、後藤編年Ⅳ-1後半～Ⅳ-3期に該当する。田木山1号墳からは大きさの異なる刀が3振出土しており、白杵（1984）の均等両関栗尻中細莖に該当することから、7世紀代のものである。以上から下谷保10号墳と桜山1号墳は7世紀中葉頃に比定でき、形状が類似している田木山1号墳もほぼ同時期に築造されたと考えたい。



第 18 図 北武蔵から伝播した横穴式石室②（報告書をもとに執筆者作成）

なお、下谷保古墳群と桜山古墳群は両方とも切石積みと河原石積みの石室が併存する群集墳である。したがって、これらの群集墳の被葬者集団同士は、その性格も共通している可能性がある。

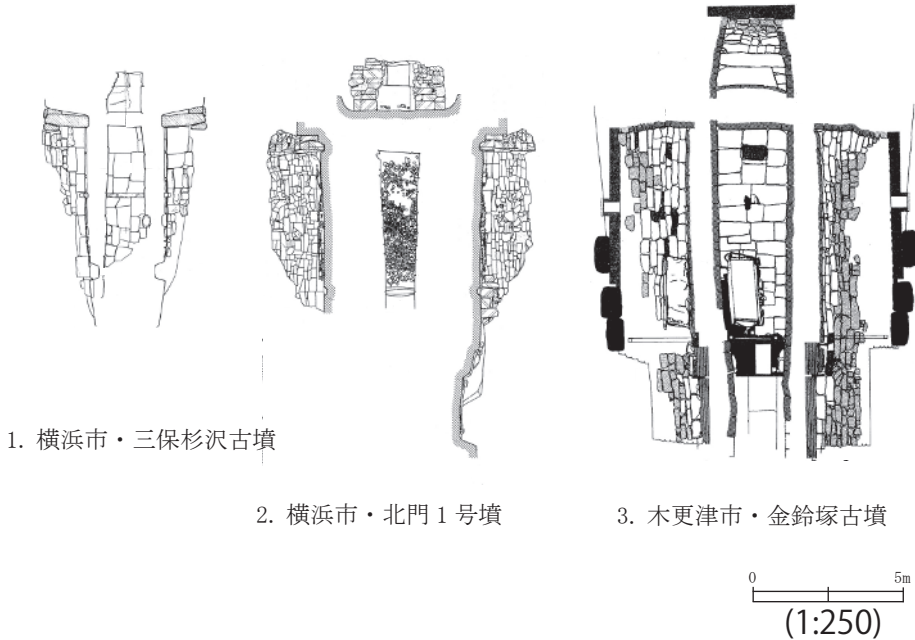
（上総からの伝播）

南武蔵の無袖形 B-b-3 型の例として、筆者編年の I 期に位置づけられる横浜市三保杉沢古墳（5，第 19-1 図）と北門 1 号墳（6，第 19-2 図）をあげたい。三保杉沢古墳の築造年代は、川西編年 V 期の円筒埴輪と TK43 型式の須恵器の腿が出土していることから 6 世紀後半頃に、北門 1 号墳は川西編年 V 期の円筒埴輪と平林編年 I 期に該当する鉄鍬が出土していることから 6 世紀後半に、各々比定できる。

南武蔵の無袖形 B-b-3 型の起源として考えられるのは、小櫃川水系に分布する無袖形石室である。小櫃川水系では後期の大型前方後円墳である木更津市金鈴塚古墳（49，第 19-3 図）や終末期の群集墳に切石積みの無袖形石室が採用される（小沢 1992）。しかし、明確に祖形と断定できる例が未だ確認できていないため、ここでは類似する石室の 1 例として金鈴塚古墳を挙げたい。

金鈴塚古墳との共通点は袖構造以外に、①石材の大きさ・形状（小さい，細長い，不揃い），②長方形の平面形態が挙げられる。また横浜市三保杉沢古墳は、金鈴塚古墳同様に床面に切石を敷いている点が共通していることから、上総南西部からの伝播が想定されている（草野 2016，第 3 章第 7 節）。一方石室規模や床石の敷き方は異なっている。金鈴塚古墳は須恵器が古いもので TK209 型式古段階，鉄鍬が平林編年 II 期に該当し，6 世紀末葉頃に比定できる。

同じく第 I 期の例として、両袖形 B-c-1 型である世田谷区喜多見稲荷塚古墳（17，第 20-1 図）



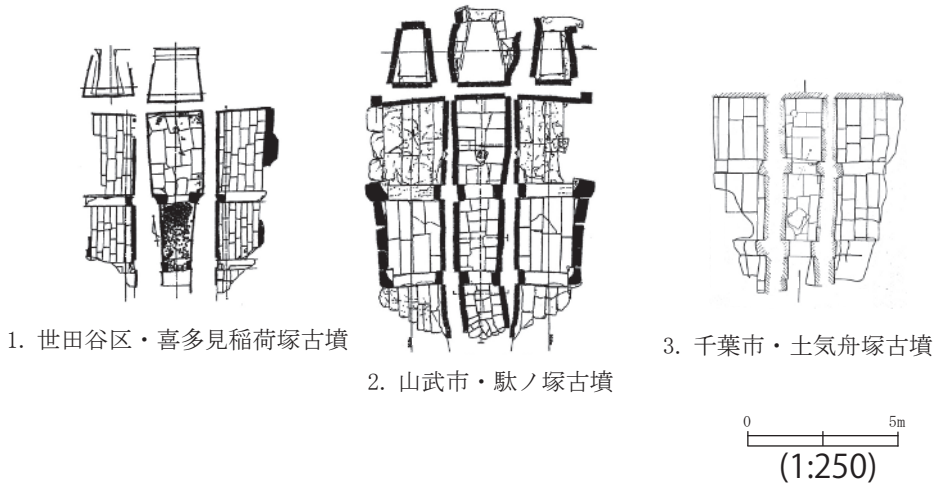
第19図 上総から伝播した横穴式石室①（報告書をもとに執筆者作成）

をあげる。出土の鉄鏃は平林編年Ⅱ期に該当し、十菱（1985）によると喜多見稲荷塚古墳の前段階である慶元寺1号墳から川西編年Ⅴ期の円筒埴輪が出土していること、喜多見稲荷塚古墳は埴輪を伴わず、出土した土師器が鬼高式中頃の製作であることから7世紀初頭頃に比定できる。

喜多見稲荷塚古墳の祖形は、山武市駄ノ塚古墳（47、第20-2図）、千葉市土気舟塚古墳（48、第20-3図）と想定したい。その根拠は、石室は単室と複室の違いはあるものの、平面形態に加えて①横長の切石を用いる点、②床面に切石を敷設する点、③奥壁に鏡石を用いる点、以上4点が共通している。ただし、墳形は喜多見稲荷塚古墳が小規模な円墳（桜井1962）、駄ノ塚古墳が大型方墳（白石ほか1996）、土気舟塚古墳が二重周濠をもつ墳長約40mの前方後円墳（中村1967）と異なっており、被葬者の階層は一致していないようである。さらに推論すると、上総の高位の地域豪族から、南武蔵のやや下位の豪族へ技術が伝わったとも考えられる。

駄ノ塚古墳から出土した鉄鏃は、古いもので平林編年Ⅰ期に該当する。また、須恵器はTK209型式である。したがって初葬は、喜多見稲荷塚古墳と相前後する7世紀初頭頃と考えられる。

土気舟塚古墳は墳丘から出土した須恵器のフラスコ形長頸瓶と高杯、小型有蓋壺が後藤編年Ⅳ-1中期に該当するものの、石室内からは年代のわかる遺物は出土していない。二重周濠をもつ前方後円墳であることを考慮して、7世紀初頭頃の築造と考えた。



第20図 上総から伝播した横穴式石室②（報告書をもとに執筆者作成）

駄ノ塚古墳は、山武地域の横芝光町姫塚古墳や山武市不動塚古墳（6世紀後半～6世紀末頃）の流れを汲んでいることが指摘されており（草野2016, 第2章第2節）、この系統の石室は上総で成立したものと考えられる。また白井（1992）によると、山武地域に集中する複室構造の石室は東京湾岸の養老川・村田川流域にも分布しており、山武地域から養老川に波及した後、東京湾を横断して多摩川下流域に伝播したと想定できる。

両袖形B-c-1型は、その後、南武蔵で平面形態、奥壁構造ともに変化し、平面形態が正方形のもの、3室構造で平面形態が正方形のものとなり、南武蔵独自の石室系統としてⅢ期まで継続する。

古墳時代後期後半の上総と武蔵の交流については、横穴式石室の構造の共通性以外にも、考古学的根拠が複数ある。例えば金鈴塚古墳は秩父地方産の緑泥片岩製の箱式石棺を石室内に有している（太田ほか1951, 井上ほか編2020）。また北門1号墳の埴輪は埼玉県鴻巣市生出塚（おいねづか）窯産であり、人物埴輪は下総の市原市山倉1号墳と非常に類似する（滝澤ほか編2007）。このように、他地域の首長同士が生出塚窯産の埴輪や筑波石、房州石、秩父石といった石棺や石室石材の長距離交換を始めるのである。白井久美子（2007）は、この交流について、恐らく畿内の政権の与り知らぬ性格のものと主張した。

また草野潤平（2016, 第3章第7節）は埴輪・石室石材の広域供給と関連して、上総から南武蔵に無袖形石室が伝播し、磯石（房州石）の供給と相まって東京湾沿岸地域圏形成の一翼を担ったものと評価した。そして先述した喜多見稲荷塚古墳と山武地域の横穴式石室の類似性は、7世紀に入ってもこの交流が続いていたことを示すとした。筆者も草野と同じく、東京湾沿岸を介した物流網の中で上総から横穴式石室が伝播したのと考えたい。南武蔵では荒川下流域

の赤羽台3号墳(1)に房州石が用いられ、鶴見川流域の川崎市第六天古墳(4)では秩父地方産の緑泥片岩製の箱式石棺を石室内に蔵していることから(東北新幹線赤羽地区遺跡調査団編1986、柴田・森1953)、この東京湾沿岸を介した首長同士の経済的やり取りの恩恵を受けた地域であるといえる。

さらに金鈴塚古墳と第六天古墳は、床面に切石を敷く点、金銅製の鈴が多量出土している点、多数埋葬が認められる点が共通しており、一部の構築技術に加えて葬送儀礼も伝播したと考えられる。

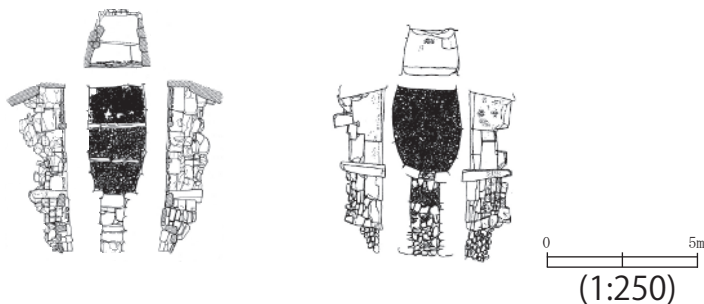
3-2 情報の伝達による伝播

(北武蔵からの伝播)

南武蔵の横浜市赤田2号墳(7、第21-1図)は両袖形A'-b-3型、つまり玄室床面胴張り形・側壁は大きさが不揃いの長方形石材による切石切組積み・奥壁は基底に大型の長方形切石をもつ、といった構造の石室である。そして、この古墳はこの型式の初現例である。赤田2号墳からはTK43型式の杯、平林編年I期に該当する鉄鏃が出土しており、また埴輪を持たない。以上から、6世紀後半～末頃の築造、筆者編年のI期と考える。

この古墳の横穴式石室の祖形として想定するのは、熊谷市塩古墳群中の径22mの円墳、西原18号墳(46、第21-2図)(塩野ほか1995)である。ほぼ同規模で同じ墳形である赤田2号墳との共通点として、①胴張り形の玄室に狭長な羨道がつく点、②奥壁から羨道に向かって石材が小さくなる点が挙げられる。また、赤田古墳群は新しくなるごとに玄室長が短くなり、西原18号墳の玄室形態に近くなることも留意したい。

ただし次のような相違点が見られる。①西原18号墳の奥壁に接する側壁石材が大型であること。②西原18号墳の羨門付近には河原石を積んでいること。③赤田2号墳よりも西原18号墳の石室の方が、胴張り形が顕著であること。④赤田2号墳には床面への切石敷設や仕切り石が認められるが、西原18号墳には認められないこと。最後の、床面へ切石を敷設する例は鶴



1. 横浜市・赤田2号墳

2. 熊谷市・西原18号墳

第21図 北武蔵から伝播した横穴式石室③(報告書をもとに執筆者作成)

見川流域の石室に認められる特徴であるが、その遡源地は同様の石室が多く認められる上総に求めたい。

このように共通点はあるものの、平面形態や石材の大きさに違いがあり、床面には上総からの影響が認められる。したがって、複数地域からの情報の伝達の結果構築されたものと解釈した。西原 18 号墳から出土した円筒埴輪は川西（1978）編年Ⅴ期に該当し、鉄鏃はおおむね平林編年Ⅰ期である。須恵器は後藤編年Ⅳ-Ⅰ期に該当する。以上から、6世紀後半頃に比定できる。

同じ両袖形 A'-b-3 型の第六天古墳（4）は、胴張り形を呈し、残存状態が悪いので断言はできないが複室構造の可能性もある。北武蔵の石室の要素が認められる一方で、明確な祖形といえる例は見つけれない。また先述した通り、上総に遡源を求められる特徴ももっている。第六天古墳の築造年代は、須恵器が TK209 型式、鉄鏃が平林編年Ⅰ期末～Ⅱ期に該当することから、7世紀初頭頃に比定できる。筆者編年のⅠ期にあたる。

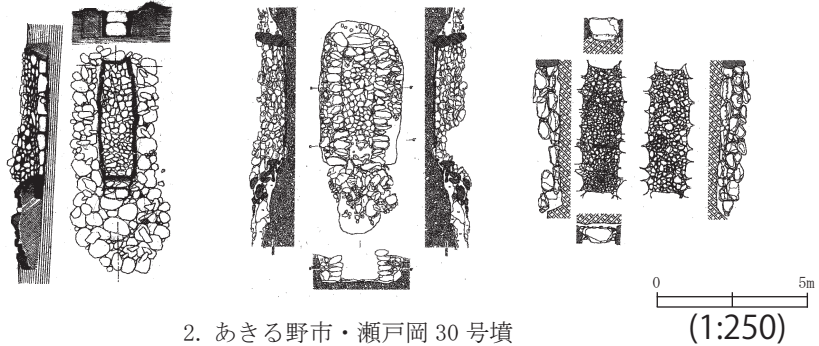
このように両袖形 A'-b-3 型は、北武蔵と上総双方の特徴が認められる。これは先述したような東京湾沿岸を介した首長同士の交流の結果、南武蔵に双方の石室の情報が断片的にもたらされてできた型式と解釈できる。

そのほか北武蔵からの伝播を想定しうるのは、自然石積みの両袖形 A 型である。これらは、南武蔵に先行して胴張り形の石室が多く構築された北武蔵からの伝播が想定できる。しかし、北武蔵における両袖形かつ平面形態が胴張り形の石室は狭長な長方形（短冊形）の無袖形石室から変化したものと指摘されている（増田 1989, 小林 2008）。またこれらの無袖形石室は無墓壇のものが大半で（草野 2016, 第 4 章第 1 節）、両袖形に変化しても石室が土坑内に構築される例は少ない。また北武蔵では横穴式石室を主体部とする古墳の中に、馬蹄形の控え積みや葺石を用いたものが知られており（青木 2015）、これらは南武蔵ではあまり見られない特徴である。

石室を土坑内に構築する例は、東海地方や相模で多く見られ、多摩川上流域では東海地方からの伝播が想定できる石室も多く認められる。したがって、平面形態の情報のみ北武蔵から伝わったものと解釈したい。

（東海地方・相模からの伝播）

まず無袖形 A（玄室平面胴張り）・B（玄室平面長方形）型は、東海地方から相模を経由して南武蔵に伝播したと考えたい。これらの石室の大きな特徴としては、土坑内に石室全体あるいは半分をおさめる構造を呈している点である。無袖形 A 型のある野市瀬戸岡 32 号墳（39, 第 22-1 図）や同市瀬戸岡 30 号墳（39, 第 22-2）の祖形として富士市船津 L-209 号墳（51, 第 22-3 図）を挙げたい。その根拠として、①平面形態が狭長な胴張り形であること。②開口部か



2. あきる野市・瀬戸岡 30 号墳

1. あきる野市・瀬戸岡 32 号墳

3. 富士市・船津 L-209 号墳

第 22 図 東海地方・相模から伝播した横穴式石室①（報告書をもとに執筆者作成）

ら 1 段下がる構造になっていること。③石室が土坑内に構築されていること。④奥壁に大きい石を置くことの 4 点が挙げられる。さらに松崎（2001）は瀬戸岡 30 号墳と船津 L-209 号墳、同 L-212 号墳との共通点として、羨道外に延びる墓道を挙げ、酷似しているとした。筆者は墓道の長さや石室の大きさから船津 L-209 号墳の方がより類似していると考えたい。

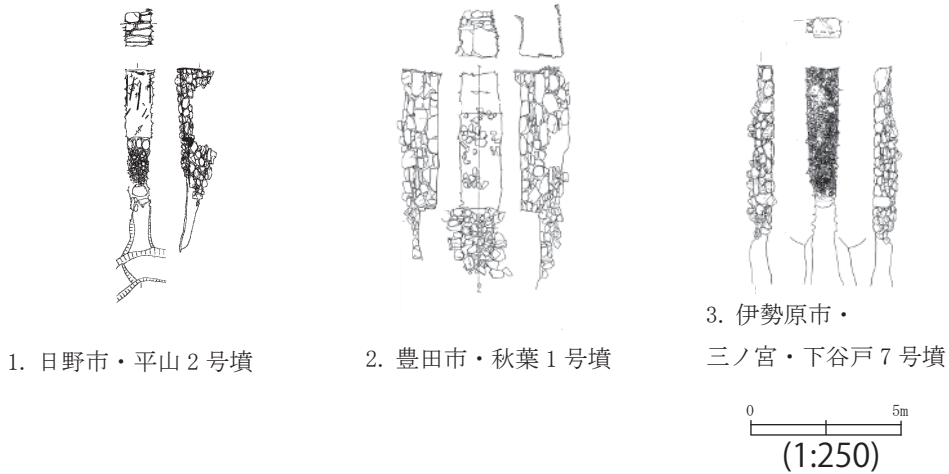
瀬戸岡 30 号墳の築造年代は、鉄鏃が 2 本のみの出土で判断が難しい。土師器の杯が 7 世紀中葉の所産とされている（松崎編 2001）のでそれに従い、7 世紀中葉頃の築造と考えたい。船津 L-209 号墳は、出土した須恵器が後藤編年 IV -1 ~ IV -2 期であるため、7 世紀前半頃に比定できる。筆者の編年の II 期に位置づけられる。

無袖形 B 型の初現例である日野市平山 2 号墳（31, 第 23-1 図）は、羨道から玄室に降りる構造となっている「竪穴系横口式石室」の影響を受けたものと理解されてきた（池上 1992, 草野 2016, 第 4 章第 1 節）。出土した鉄鏃は平林編年 I 期に該当し、6 世紀末葉頃の築造、筆者編年の I 期にあたる。

草野（2016, 第 4 章第 1 節）は平山 2 号墳の玄室と羨道の境に河原石が 3 段積み、高さを揃える形で羨道部に厚い礫が敷かれている点に注目した。そして同様の特徴が 6 世紀中葉に築造された豊田市秋葉 1 号墳（53, 第 23-2 図）などに認められ、東海地方において竪穴系横口式石室の流れを汲む石室を遡源候補として挙げた。なお草野（2016, 第 4 章第 1 節）、小林（2014, 第 2 章第 4 節）は類似する石室の存在から、中間地域として相模を介した受容を想定している。

筆者は相模の事例として、伊勢原市三ノ宮・下谷戸 7 号墳（50, 第 23-3 図）を挙げ、秋葉 1 号墳と融合して平山 2 号墳に繋がると考えた。三ノ宮・下谷戸 7 号墳は玄門に向かってやや狭くなる構造で、平山 2 号墳も同様の平面形態である。三ノ宮・下谷戸 7 号墳の築造年代は、出土した鉄鏃が平林編年 I 期に該当することから 6 世紀後半頃に比定できる。

また筆者は無袖形 B 型のあきる野市瀬戸岡 17 号墳（39, 第 24-1 図）と日野市万蔵院台 3 号



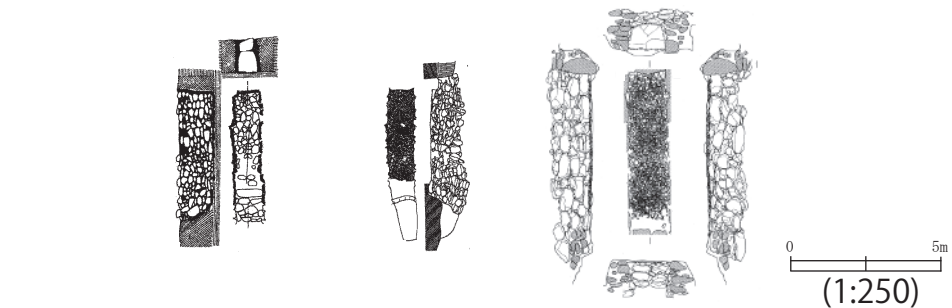
1. 日野市・平山2号墳

2. 豊田市・秋葉1号墳

3. 伊勢原市・
三ノ宮・下谷戸7号墳

第23図 東海地方・相模から伝播した横穴式石室②（報告書をもとに執筆者作成）

墳（29，第24-2）の祖形として，富士市中原4号墳（52，第24-3図）をあげたい。その根拠として①平面形態が長方形であること，②開口部から1段下がる構造になっていること，③石室が土坑内に構築されていることの3点が挙げられる。また草野（2016，第4章第1節）は，万蔵院台3号墳の閉塞石が小口積みで垂直に積み，開口部の段構造や側壁と一体的に構築された壁状閉塞施設としている。そして同様の閉塞施設をもつ例として中原4号墳を挙げている。筆者は実測図から，瀬戸岡17号墳も河原石を小口積みにして閉塞したと考えたい。万蔵院台3号墳の築造年代は，鉄鏃が平林編年Ⅰ期に該当することと，報告書内（坂詰・持田編1984）で須恵器のフラスコ形長頸瓶が7世紀前半頃の所産とされていることから，7世紀初頭～前半頃と考える。おおむね筆者編年のⅠ期末頃としたい。瀬戸岡17号墳からは遺物が一切出土していない。墓道がないことから万蔵院台3号墳より退化した形態と捉えたが，玄室は小型化していないため，7世紀前半頃の築造と考えたい。筆者編年のⅡ期にあたる。中原4号墳は



1. あきる野市瀬戸岡17号墳

2. 日野市万蔵院台3号墳

3. 富士市・中原4号墳

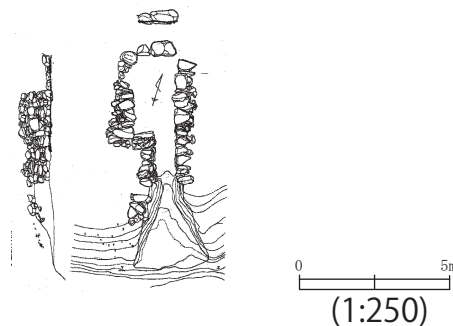
第24図 東海地方・相模から伝播した横穴式石室③（報告書をもとに執筆者作成）

TK43 型式の須恵器と平林編年 I 期の鉄鏃が出土していることから、6 世紀後半頃の築造に比定できる。

このように 6 世紀後半から 7 世紀にかけて、東海地方から相模、南武蔵で類似する無袖形石室が構築されており、各地域で独自の変化をしている状況が見てとれる。そして伝播の要因として、小林孝秀（2014、第 2 章第 4 節）の指摘するように古東海道を介した物流ルートが想定できる。

伝播の問題からやや逸脱するが、両袖形 A 型と無袖形 A 型、B 型が併存する瀬戸岡古墳群の在り方についても触れておきたい。南武蔵の中で複数型式の石室が併存する古墳群は他にもあるが（御嶽塚古墳群、四軒在家古墳群、下谷保古墳群など）、これほど多様な型式が併存する古墳群はほかにない。瀬戸岡古墳群の編年は、羨道の消失過程や尺度といった観点からされてきた（池上 1982、松崎編 2001、馬橋 2005）。一方草野（2016、第 4 章第 1 節）は形態的にバラエティのある石室群を一系列の変遷過程で捉えることに異議を唱え、複数系統の石室で構成される古墳群として捉えている。筆者は系統差と時期差の双方を視野に入れ、平面形態の違いが系統差を表し、石室の大きさや羨道の有無の違いが時期差を表すと考えたい。瀬戸岡古墳群は出土遺物がほとんどないため、系統差が何の違いによるものなのかは断定できない。しかし、同じ型式の石室同士は近い位置に分布しているようなので（松崎編 2001）、おそらく集団の違いを表していると思定したい。

最後に、片袖形 B（玄室平面長方形）型の初現例である日野市万蔵院台 2 号墳（29、第 25 図）の祖形は不明である。小林（2014、第 2 章第 4 節）によると 6 世紀後半～末頃、下総・相模・南武蔵に片袖形石室がまともって構築される状況が認められるという。小林は、下総の片袖形石室を有する法皇塚古墳や城山 1 号墳、相模の埴面古墳は墳丘規模や副葬品から、政治的に重要な首長墓であると指摘した。



日野市・万蔵院台 2 号墳

第 25 図 東海地方・相模から伝播した横穴式石室④（報告書をもとに執筆者作成）

そして、関東地方に先行して東海地方で片袖形石室が構築された東海地方について鈴木一有(2003)は、上位階層で構築される片袖形石室は畿内に源流をもち、中位階層の片袖形石室は三河系石室との融合が進行すると指摘した。小林(2014, 第2章第4節)は、こうした畿内系片袖形石室は6世紀前半以降、古東海道を經由した情報伝達によって、前方後円墳を中心とする有力古墳の埋葬施設として拠点的に採用され、畿内との政治的関係性が伺える石室であると述べた。

しかしながら、万蔵院台2号墳は墳丘規模や副葬品からみても有力古墳とは言い難く、畿内政権との関係性は伺えない。一方で、そのほかの片袖形石室が古東海道からの伝播を想定できることから、万蔵院台2号墳も東海地方・相模からの伝播の1例として筆者は捉えておきたい。

4. 結論

以上をまとめると、切石積みの石室は石室構築者集団の移動による直接的伝播による例が多く、その後は小地域ごとに独自の変化をしながら、継続的に石室が構築されていることがわかった。このことから、被葬者集団の伝統が強く反映されていたことが伺えるが、伝播の要因はそれぞれ異なっていることもわかった。

一部の切石積みの石室と多摩川中・上流域に分布する自然石積みの石室は情報の伝達による伝播を想定した。この伝播は、既存の物流網である古東海道、東京湾沿岸を介した例が多い。また、自然石積みの石室型式は複数の群集墳で同じようなものが取り入れられることや群集墳内で複数型式が同時期に構築されることから、流行的な広がりとして捉えられる。

このように南武蔵における横穴式石室の導入は、被葬者集団が1番アクセスしやすい既存の物流網による例が多い。一方で、工人ごとか情報のみの伝播かは、地域間の距離や被葬者の階層に左右される。さらに1部の集団は有力者を伴って北武蔵から入植し、南武蔵の開発をおこなって、国府の成立に繋がる基盤をつくっている。そして、その後の展開から、切石積みの石室と自然石積みの石室の被葬者集団はその性格がかなり異なることがわかった。

以上のことから、古墳時代後期・終末期の南武蔵は、横穴式石室導入時からさまざまな階層構造の集団が混在しており、独自のネットワークで新たな文化を取り入れ、その後もまとまることなく律令期を迎えた地域であるといえるだろう。

注

- (1) 紙面の都合上、対象とした横穴式石室すべてを編年図に載せることができなかった。
- (2) 型式名の「型」の字は、図版の大きさの問題で省略した。
- (3) 本稿での「石室」は横穴式石室を指す。

参考文献

- 青木敬 2006 「武蔵府中熊野神社古墳の墳丘と石室」『東京考古』第 24 号 pp.75-97 東京考古談話会
- 青木弘 2015 「埼玉県における後・終末期古墳の築造技術—築造工程と『同工石室』の検証—」『埼玉考古』第 50 号 pp.55-100 埼玉考古学会
- 池上悟 1980 「東国における胴張り石室の様相」『立正史学』第 47 号 pp.63-90 立正大学史学会
- 池上悟 1982 「南武蔵・多摩川流域における横穴式石室の導入と展開」『物質文化』第 39 号 pp.21-36 物質文化研究会
- 池上悟 1992 「南武蔵における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集 東国における古墳の終末(本編)特定研究「日本歴史における地域性」成果報告-2 第Ⅱ部東国における古墳終末の様相 pp.245-284 国立歴史民俗博物館
- 白杵勲 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 pp.49-70 PHALANX—古墳文化研究会—
- 江口桂 2005 「前方後円墳以後と古墳の終末—東京都—武蔵府中熊野神社古墳と多摩川流域の様相を中心に—」『前方後円墳以後と古墳の終末』第 10 回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料 pp.137-154 東北・関東前方後円墳研究会
- 太田宏明 2009 「九州系石室の伝播・拡散の過程—畿内型石室との比較検討を通じて—」杉井健(編)『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会 2007 年度熊本大会分科会 I 記録集 pp.101-128 北九州中国書店
- 太田宏明 2016 『横穴式石室と古墳時代社会—遺構分析の方法と実践—』雄山閣
- 小沢洋 1992 「上総南西部における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集 東国における古墳の終末(本編)特定研究「日本歴史における地域性」成果報告-2 第Ⅱ部東国における古墳終末の様相 pp.329-366 国立歴史民俗博物館
- 小野本敦 2008a 「流通路から見た武蔵の後・終末期古墳」『東京考古』第 26 号 pp.15-26 東京考古談話会
- 小野本敦 2008b 「東京都大田区観音塚古墳の埴輪」『埴輪研究会誌』第 12 号 pp.71-78 埴輪研究会
- 小野本敦 2009 「多摩川下流域の横穴式石室について」『東京考古』第 27 号 pp.61-76 東京考古談話会
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻 2 号 pp.95-164 日本考古学会
- 草野潤平 2006 「複室構造胴張り形切石室の動態—武蔵府中熊野神社古墳の位置づけをめぐる—」『東京考古』第 24 号 pp.55-73 東京考古談話会
- 草野潤平 2016 『東国古墳の終焉と横穴式石室』雄山閣
- 後藤健一 2015 『遠江湖西窯跡群の研究』六一書房
- 小林孝秀 2008 「北武蔵における横穴式石室の動向とその系譜」『専修史学』第 44 号 pp.4-31 専修大学歴史学会
- 小林孝秀 2014 『横穴式石室と東国社会の原像』雄山閣
- 十菱駿武 1985 「多摩の古墳時代の分布と変遷」滝口宏(編)『古代探叢』Ⅱ—早稲田大学考古学会創立 35 周年記念考古学論集— pp.415-436 早稲田大学出版部
- 白井久美子 1992 「上総北西部における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 44 集 東国における古墳の終末(本編)特定研究「日本歴史における地域性」成果報告-2 第Ⅱ部東国における古墳終末の様相 pp.367-386 国立歴史民俗博物館
- 白井久美子 2007 「関東の後・終末期古墳群の特性」佐々木憲一(編)『関東の後期古墳群』考古学リーダー 12 第Ⅰ部 基調講演 pp.33-52 六一書房
- 鈴木一有 2003 「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」石橋直也・井口智博・井鍋誉之・大谷宏治・菊池吉修・鈴木一有・田村隆太郎・宮沢浩司・山田康雄(編)『静岡県の横穴式石室』pp.255-266 静岡県考古学会
- 田中広明 1983 「埼玉県比企丘陵における後・終末期古墳—特に截石切組積古墳の地域的特徴—」『埼玉考古』第 21 号 pp.31-46 埼玉考古学会
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店

- 平林大樹 2013「信濃における後期・終末期古墳副葬の変遷」『物質文化』第93号 pp.123-138 物質文化研究会
- 広瀬和雄 2012「多摩川流域の後・終末期古墳—7世紀における東国地域の動態—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第170集 pp.19-65 国立歴史民俗博物館
- 増田逸朗 1989「埼玉県における横穴式石室の受容」茂木由行・岸田治男・石塚久則・井上昌美(編)『第10回三県シンポジウム 東日本における横穴式石室の受容』第2分冊 pp.712-804 千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究所・群馬県考古学研究所(増田逸朗 2002『古代王権と武蔵国の考古学』慶友社に所収)
- 松崎元樹 2012「多摩郡における古墳時代終末期の動向—第19回多摩の原始・古代を考えるつどいより—」『多摩考古』第42号 pp.25-34 多摩考古学研究会
- 馬橋利行 2005「考察『青柳古墳群の構造と位置付けについて』」(報告書9, pp.254-283)
- 右島和夫 1993「角閃石安山岩削石積石室の成立とその背景」『古文化談叢』第30集 pp.1109-1142 九州古文化研究会

(報告書一覧) 第表の番号と対応。

- 1: 後藤守一・三木文雄 1956『多摩地方の古墳群』東京都文化財調査報告第3冊 東京都教育委員会
- 2: 松崎元樹(編) 2001『天神前遺跡・瀬戸岡30号墳・上賀多遺跡・新道通遺跡・南小宮遺跡—都市計画道路秋多3・4・6号線用地内の発掘調査報告—』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第95集 東京都生涯学習文化財団・東京都埋蔵文化財センター・東京都建設局
- 3: 大谷猛(編) 1995『多摩地区所在古墳確認調査報告書』多摩地区所在古墳確認調査団
- 4: 和田哲(編) 1997『大神古墳』昭島市大神古墳発掘調査団
- 5: 和田哲(編) 1979『東京都昭島市田中町浄土古墳』昭島市教育委員会
- 6: 和田哲 1982『考古学からみた昭島市』昭島市教育委員会事務局社会教育課
- 7: 和田哲(編) 1983『浄土古墳群』昭島市教育委員会
- 8: 和田哲・金子浩昌(編) 1977『経塚下遺跡』昭島市経塚下遺跡調査会
- 9: 和田哲・馬橋利行・桜井聖悟(編) 2005『東京都国立市四軒在家遺跡Ⅱ』国立市文化財調査報告第49集
- 10: 黒沢和彦 1986『下谷保1号墳』国立市文化財調査報告第22集 国立市教育委員会
- 11: 吉田恵二・桐生直彦(編) 1988『塚原古墳群—5号墳の調査(昭和62年度)—』多摩市教育委員会
- 12: 吉田恵二(編) 1989『東京都多摩市塚原古墳群—4・5号墳の調査—(昭和63年度)』多摩市教育委員会
- 13: 桐生直彦・山崎和巳(編) 1986『東京都多摩市和田百草遺跡群—多摩市計画道路1・3・1号線和田地内拡幅工事とともなう調査—』多摩市埋蔵文化財発掘調査報告10 多摩都市計画道路事業1・3・1号線関連遺跡調査会
- 14: 坂詰秀一・持田友宏(編) 1984『日野市史史料集』考古資料編 日野市
- 15: 持田友宏・池上悟 1988「古墳時代」池上悟・遠藤政孝・児玉幸多・坂詰秀一・高島緑雄・田中紀子・持田友宏『日野市史』通史編1 自然 原始・古代 第4章 pp.179-226 日野市史編さん委員会
- 16: 久保常晴(編) 1972『神明上遺跡群Ⅱ—第Ⅰ・Ⅱ次調査の概要—』日野市神明上遺跡調査会
- 17: 上野猛・服部敬史 1972『船田—東京都八王子市船田遺跡の第Ⅱ次調査』八王子市船田遺跡調査会(第Ⅱ次)
- 18: 西野善勝 2009「2. 御嶽塚古墳群の分析」西野善勝(編)『武蔵国府関連遺跡調査報告40—西府・本宿町地域(御嶽塚古墳群・本宿町遺跡)の調査1—西府土地区画事業に伴う発掘調査』府中市埋蔵文化財調査報告第44集 第3章第4節 pp.46-62 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 19: 和田信行・山村貴輝・内田仁・塩野崎直子・川西直樹・富田健司・水澤文志・パリノサーヴェイ株式会社・杉原重夫・金成太郎・太田陽介・藤森靖枝 2008『東京都府中市武蔵国府関連遺跡調査報告—「レクセル府中西府」新築工事に伴う事前調査—』加藤建設
- 20: 戸井晴夫(編) 1983『宇津木台遺跡群Ⅱ—1981年度発掘調査報告書(1)—』八王子市宇津木台地区遺跡調査会

- 21: 佐々木蔵之介 1967「古墳時代」八王子市史編さん委員会（編）『八王子市史』下巻 第2章第1節 pp.171-222 八王子市役所
- 22: 東北新幹線赤羽地区遺跡調査団（編）1986「古墳時代後期」『赤羽台・袋低地・舟渡』東北新幹線建設工事に伴う遺跡発掘調査概要 pp.27-36 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
- 23: 鈴木直人 1996「豪族の眠る丘」中島広顕・牛山英昭（編）『北区史』通史編原始古代第3章第3節 pp.195-279 東京都北区
- 24: 佐伯秀人 2002「紙上報告 日の出町周辺の古墳」『多摩川流域の古墳時代—国府以前の様相—』多摩地域史研究会第12回大会発表要旨 pp.107-126 多摩地域史研究会
- 25: 坂詰秀一・小林三郎・塚原二郎・紺野英二（編）2005『武蔵府中熊野神社古墳』府中市埋蔵文化財調査報告第37集 府中市教育委員会・府中市遺跡調査会
- 26: 高麗正（編）2011『天文台構内古墳Ⅰ—東京都三鷹市大沢天文台構内古墳再確認調査報告書—』三鷹市埋蔵文化財第33集 三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会
- 27: 吉田恵二・桐生直彦・小林利晴 1996『稲荷塚古墳—墳丘部確認にともなう調査—』多摩市埋蔵文化財調査報告第39集 多摩市教育委員会
- 28: 久保常晴 1952「川崎市加瀬台3号墳発掘調査報告」『銅鐸』第8号 pp.1-9 立正大学考古学会
- 29: 柴田常恵・森貞成 1953『日吉加瀬古墳—白山古墳・第六天古墳調査報告—』考古学・民族学叢刊第2冊 三田史学会
- 30: 滝澤亮・滝澤友子・土屋哲樹・浅賀貴広（編）2007『横浜市北門古墳群Ⅰ』盤古堂
- 31: 大川清・吉田好孝・渡辺務 1990『横浜市緑区 赤田の古墳』日本窯業史研究所
- 32: 梅沢重昭・白石竹雄・諸星政得 1957「東京都大田区田園調布荏原古墳群第四号・第九号墳発掘調査報告」『武蔵野』第231号 232号合併号 pp.24-43 武蔵野文化協会
- 33: 後藤喜八郎（編）1989『多摩川台古墳群発掘調査報告書Ⅰ—第3・4・5・6号墳の範囲確認調査—』大田区教育委員会
- 34: 梅沢重昭・増井義巳・諸星政得 1958「東京都大田区田園調布荏原古墳群第二号・第五号・第七号墳発掘報告」『武蔵野』237号 pp.1-19 武蔵野文化協会
- 35: 河合英夫（編）1993『多摩川台古墳群発掘調査報告書Ⅱ—第1・2・7・8・9号墳の範囲確認調査—』大田区教育委員会
- 36: 後藤守一 1936『東京府下の古墳』東京府史跡名勝天然記念物調査報告書第13冊 東京府
- 37: 北原實徳（編）2016『神奈川県川崎市下麻生古墳群』下麻生古墳群発掘調査団
- 38: 坪田弘子・麻生順司・野本孝明・平田博之・森田信博・河合英夫・榊原智之・今野和浩・松坂有司・芝田英行（編）2005『久原小学校内遺跡 桐里遺跡 宝菜山古墳 観音塚古墳 大森堀ノ内遺跡』大田区の埋蔵文化財第17集 大田区教育委員会・郷土博物館
- 39: 桜井清彦 1962「喜多見稲荷塚古墳」桜井清彦・杉山莊平（編）『新修世田谷区史』付編 第2編 pp.93-108 東京都世田谷区
- 40: 桜井清彦 1981「喜多見稲荷塚古墳」川上真紀子（編）『喜多見古墳群Ⅰ』pp.26-44 世田谷区教育委員会
- 41: 四本和行・青木健二 1979『神奈川県横浜市三保杉沢遺跡群』日本窯業史研究所報告第9冊 日本窯業史研究所
- 42: 桜井清彦・菊池徹夫・十菱駿武（編）1975『世田谷区史料』第8集 考古編 東京都世田谷区
- 43: 樋口清之・金子皓彦 1973「川崎市高津区馬絹古墳発掘調査概報」『川崎市文化財調査集録』第8集 pp.96-101 川崎市教育委員会
- 44: 服部隆博（編）1994『神奈川県指定史跡馬絹古墳』保存整備・活用事業報告書 川崎市教育委員会
- 45: 野本孝明 2008「古墳石室（俗称穴八幡）【調査報告】浅間様古墳発掘調査—古墳石室保存整備事業に伴う調査—」『大田区の史跡名勝天然記念物』大田区の文化財第36集 第1章史跡・旧跡編 pp.9-40 大田区教育委員会
- 46: 清水周・佐々木克典・金井慎司（編）2014『東京都国立市梅林遺跡第14地点発掘調査報告書』下谷保10

- 号墳・梅林1号横穴墓 国立市文化財調査報告第56集 国立市教育委員会
- 47: 宇佐美哲也(編)2013『猪方小川塚古墳発掘調査報告書』狛江市文化財調査報告第28集 狛江市教育委員会
- 48: 川崎市民ミュージアム1992『遺跡ガイドブッケー—川崎の古墳めぐり—』
- 49: 布施和男(編)1982『金冠塚(山王二子山)古墳調査概報』前橋市教育委員会
- 50: 塩野博・野部徳秋・谷井彪・今泉泰之1974『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ—田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川—』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会
- 51: 小久保徹・田中英司・井上肇・利根川章彦1981『日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ—桜山古墳群—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書2 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 52: 塩野博・瀧瀬芳之・新井端1995「古墳時代の遺跡」『江南町史』資料編1 考古第5章 pp.239-492 江南町史編さん委員会
- 53: 白石太郎・杉山晋作・設楽博巳・大久保奈々1996『千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告—東国における古墳の終末〈附編〉』国立歴史民俗博物館研究報告第65集 国立歴史民俗博物館
- 54: 中村恵次1967「千葉山武郡土気舟塚古墳の調査」滝口宏(編)『古代』第48号 pp.17-32 早稲田大学考古学会
- 55: 太田徳蔵・隆高鑑・武田宗久・郡司幹雄・北詰榮男・高橋在久・平野元三郎・瀧口宏・西村正衛・玉口時雄・小杉一雄・前澤輝政・大川清・鈴木秀枝・直良信夫・高橋省巳・亙理俊次・塚本文1951『金鈴塚古墳』千葉県教育委員会
- 56: 井上賢・松本勝・稲葉昭智(編)2020『金鈴古墳出土品再整理報告書』木更津市郷土博物館金のすず
- 57: 宍戸信悟・宮坂淳一・松田光太郎・三瓶裕司2000『三ノ宮・下谷戸遺跡(No.14)Ⅱ—第一東海自動車道・大井松田間拡幅工事に伴う調査17—』かながわ考古学財団調査報告76集 かながわ考古学財団
- 58: 渡井義彦(編)1999『船津古墳群—船津L-第186・208～216号墳 製茶工場建設に伴う発掘調査—』富士市教育委員会
- 59: 佐藤祐樹(編)2016『伝法中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告第59集 富士市教育委員会
- 60: 田端勉・安西保承・梅村清春・沢田悟・宮田伸一1974『豊田市郷土資料館研究報告 豊田市埋蔵文化財調査集報』第1集古墳Ⅰ 豊田市教育委員会

Elite Regional Interaction as Evidenced by Corridor-Style Horizontal Burial Chambers from the Late Sixth to Seventh Century in the Kantō Region of Eastern Japan

FURUMA Kanako

This paper approaches aspects of elite regional interactions that took place from the late sixth to seventh centuries in the Kantō Region of eastern Japan, based on analysis of corridor-style horizontal burial chambers. The corridor-style horizontal burial chambers may be classified into many types, taking into consideration several attributes, including the floor plan of a main burial chamber, morphology/structure of the back wall, morphology/structure of the side walls, and the choice of rocks for the construction of chamber.

In the present Tokyo Metropolitan Prefecture region or southern part of the old province of Musashi, a geographical focus of this paper, numerous distinctive types of corridor-style horizontal burial chambers were adopted to burial mounds from the late sixth to seventh centuries. The author classifies these burial chambers and compares them with contemporaneous corridor-style horizontal burial chambers in surrounding regions in order to approach regional interaction at that time.

The author particularly distinguishes the cases of technological adoption of burial chambers and stylistic adaptation of burial chambers. The former is evidence of craftsmen introducing the construction technology to different regions, while the latter is evidence of visual information about burial chambers transmitted to different regions.

As a result of the author's analysis, local elites in the southern Musashi region adopted and adapted various construction technologies of burial chambers from different neighboring regions at the same time, resulting in a wide variety of types of corridor-style horizontal burial chambers. The author speculates that this variety was a result of lack of paramount chieftainship in this region, where each local elite was highly autonomous.

Keywords: Burial chambers, elite regional interactions, diffusion, sixth- and seventh-century eastern Japan.